



TITLE:

人文 第19号

AUTHOR(S):

CITATION:

人文 第19号. 人文 1979, 19: 1-50

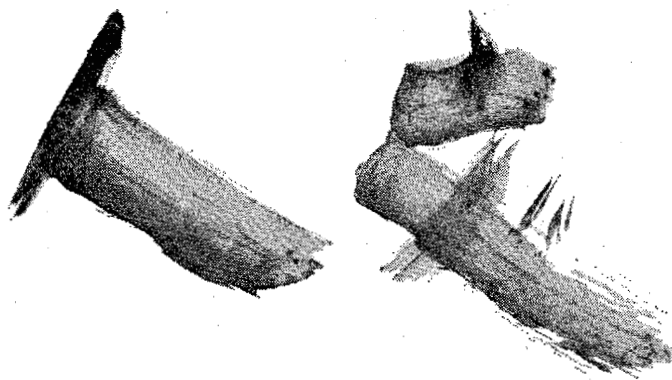
ISSUE DATE:

1979

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/57145>

RIGHT:

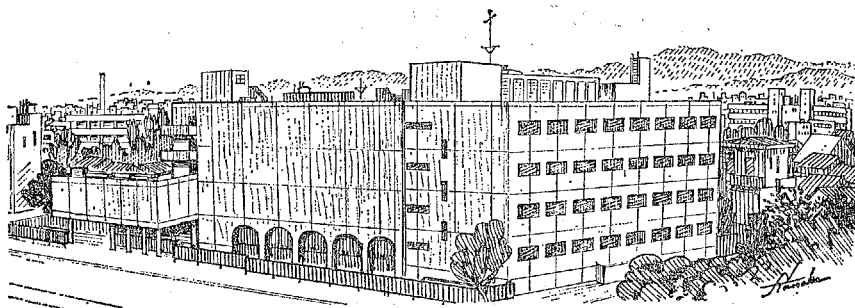


第一九号



1979

京都大学人文科学研究所



人 文 第一九号

1977年12月—1978年11月

も く じ

随 想	無題	尾崎雄二郎	2
	聞き取り奔走記	山下 正男	
	大久保利通の別邸	佐々木 克	
講 演	開所記念講演 全国水平社の福岡連隊「爆破陰謀」事件	渡部 敏	6
	中国のアナキズム	森 時彦	
	退官記念講演 日本文化のあゆみ	林屋辰三郎	
	夏期講座 文化接触の視角	吉田 光邦	
	三浦梅園の自然哲学	山田 慶児	
	東トルキスタンの詩人と歴史家	浜田 正美	
	論理と戒律と儀礼	上山 春平	
	中世大学の形成と知識人	田中 峰雄	
	本のうわさ		17
	林屋辰三郎編『幕末文化の研究』小野・竹内実『魯迅遺稿』 (岡田)・小野和子『中国女性史』(松田)・飛鳥井雅道『西郷隆盛』(山田)・山下正男『植物と哲学』(吉田)・樋口謹一『ルソーの政治思想』(狭間)・柳田聖山『夢窓』(飯沼)・多田道太郎ほか編『クラウン仏和辞典』(尾崎)・小野川秀美・島田慶次編『辛亥革命の研究』(久保田)		
共同研究の話題	テキストとしての『周礼』	江村 治樹	27
	危機の中の日常性	阪上 孝	
	中国の都市の研究	梅原 郁	30
旅	旅の思い出(河野)・ロバの井戸(飯沼)・西ドイツの青年研究者(中村)・若い日本学者たち(多田)・この国の業の深さ(大前)・土埃の日々(田中)・インドのチベット人(御牧)・故宮博物院青銅器見学旅行(林・中国・一九七八年春)・管見(樋口)・広東の街角で(梅原)・中国観劇寸感(池田)		
	書いたもの一覽(一九七七年二月—一九七八年一月)		42
	お客さま(15)人のうごき(16)外国人研修員(26)外国人研究員(26)外国人学者(26)東洋学文献センター講習会(41)		
	カット田中重雄		

無 題

尾 崎 雄 二 郎

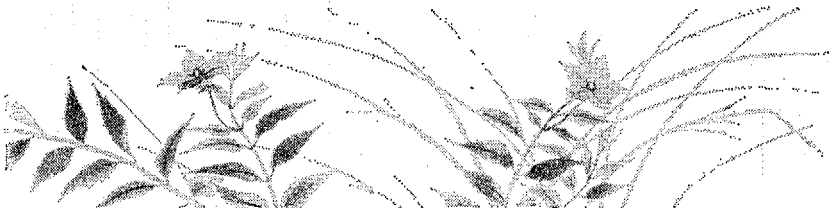
知らないうちに、大学院学生に対するいわゆる単位の認定は、その前半・修士課程のものに對してのそれ、ということになっていました。博士課程の学生は、もう教官から単位を与えてもらう「生徒」^{ジュニビル}ではなくなつて、一人前の研究者として遇せられるようになって、た、ということだと思ひました。

制度としてそうなつたということは、平均的にそうであるという現実を踏まえているわけで、したがつて、一人前の研究者として遇せられて然るべきものは、大学院の前半・修士課程の学生の中にも、可能性としては、当然、いるべきです。

文人相伊輕ンズ、といったのは、中国のむかしの文人ですが、そういう、グループ成員同士の間での嫉妬心は、いろいろな条件を綜合して、その總和が互いに近いほど、強くあらわれるはずで、したがつて多くの場合、大学院学生相互の間に反撥は最も強く、大学院

学生と助手、大学院学生と助教授、という順序で、その反撥は弱くなりまゝです。少なくとも、助教授から見た大学院学生は、たとえば大学院博士課程の学生が見た、すぐ後につづく修士課程の学生というほど、自らの存立を危うくするという感じのものではありません。

研究班などにおける年長者の役割りは、とくに功成り名遂ゲテ、停年も近くなつた（たとえばこの私でも、もう在職中、去年のエトであるウマに、再びめぐりあうことはないのですが）教授のそれは、後輩の文人たちの中から、そのすぐれたるものを、恐怖心なく発掘する、というところだけあるべきで、身体の衰えだけは、いやいやながら認めても、本当は、身体と分ちがたく結びついていて衰えていないわけのない精神の衰えは、なかなか素直には認めにくくなっている、つまりそれほどに頭の衰えている人間の仕事は、その研究班の指導などであつていいわけはありま



せん。

研究班のありようは、四十代前半までの助教が主導して助手はそれに抵抗し、大学院の学生たちはその双方に戦いを挑む（あるいは螳螂ノ斧ヲ揮ウ）という底のものであるべ

聞き取り奔走記

山下 正 男

近頃柄にもなく小型のテープレコーダーをかかえて、あちこちを飛びまわっている。いろいろのひとから戦前の西洋体験を聞くためである。突如としてこういうことを始めたのにはいちおうの理由がある。というのも河野さんを班長とする「戦前日本の西欧文化受容の形態」というテーマの特定研究グループに入れてもらうことになったからである。

ところで西欧文化の受容形態を具体的に分析するためには、受容者つまり、実際に西欧文化の受容にたずさわった個々人に当るべきである。その場合、そうした個々人の書いた自伝や手紙や著作を分析するのめけつこうで

きでしよう。（やがては、しかし、研究所全体が、教授ポストはすべて併任、通算在所十一年位に切られた助教、助手が研究に専念する学内共同利用研となるべきでしようが）。わが研究班、大学院学生にともしからず。

あるが、そうした個人が健在の場合には、直接にお会いしていろいろな質問をしながら話を聞き出す方がもっと具体的なだといえよう。

さて西欧文化の受容者が学者や知識人に限らないことはむろんである。そのほかに芸術家、実業家、外交官、軍人、技術者、職人（コック、ベーカリー、テラー）といったひとびとも当然含めべきである。そこで以上のような広範囲のひとびとのうちで戦前に欧米諸国に相当期間滞在して、西洋文化、西洋技術を見聞し摂取した人を選びだして面接のうえ話を聞くという作業を開始したわけである。

いままでのところ、まだ十二名分しか採録



していないが、もっと例数を増すことが必要である。ところでそうした十二名の聞き取り対象者となった方々はみな、きわめて好意的に協力してくださり、気持ちよく作業を進めることができた。そしてそれは今後そうした作業を続行させる勇気を与えるに十分なものであった。

ところで両大戦間の欧米諸国のうちで、もっとも激烈な変動をおこなったのはなんといってもドイツであろう。そして、実際、第一次大戦後の大インフレーションを経験した

大久保利道の別邸

幕末の動乱も終幕を迎えつつあったその前夜、慶応二年の春、大久保利道は京都寺町石薬師に穩宅をかまえた。

彼のもとには、祇園のお茶屋の娘おゆうがいて、身の廻りの世話をし、彼の子供を生み、大久保の死後も家族の一員として、生涯を送

人、共産党とナチ党との双方の、街頭デモの衝突にでくわした人、ヒットラーの演説を聞いた人、ナチがユダヤ人店のショー・ウィンドーを破壊しているのを目撃した人等々にもお会いできた。そしてそうしたひとたちの話を年代順につなぎあわせてみると、日本人の生き証人を通じてヨーロッパの歴史の流れに触れることができるのであり、そうしたこととは、文献だけを読んでいくのと違って、大そうエキサイティングな作業であるということを感じさせられた。

佐々木 克

ったのであったが、従来ほとんど彼女のことにはふれられることがなかった。あのロマンのかけらも匂わぬような大久保のもとにも、木戸孝允とお松、坂本竜馬とおりゆうのように、幕末史の裏面をいろいろ花が咲いていたのであった。



慶応二年の春といえは、この年一月には、討幕のための薩長提携がなり、これから大久保の穩宅には長州藩士が幕吏の目をかすめて出入りして、政治謀議の場とし、また同時に地下活動を続ける岩倉具視との連絡をとる、朝廷工作の場ともなっていたのであった。

大久保が京都から東京麴町に居を移したのは明治二年五月で、のち九年一月に同じ所に洋館を新築、米客に洋食を饗する、公邸・本邸となったのである。同年四月、新邸に天皇の臨幸を迎え、そして暗殺集団が待ちかまえているとも知らずに、十一年五月十四日朝、馬車に乗り込んだのも同じこの邸からなのであった。

ところで、大久保の日記をみると、六年十一月十六日に、「今朝八字比、高輪別邸ニ至ル」という記述がある。これは芝二本榎にあった家で、その広い庭には殖産興業の政治指導者にふさわしく、いく種もの果樹等が植えられ、一種の実験農場的様相であるとともに、五代友厚や松方正義ら友人との囲碁の場であった。そしてまた、おゆうとその子供の住む

所でもあった。

大久保の妻ます女が、鹿兒島から子供を連れて上京したのは明治七年十二月九日であった。大久保の高輪別邸行きも、以後めだつて頻度をますのであるが、それも毎月の一日、六日、十一日、十六日等々、一と六の日に定期便のごとく通うのである。こんなところにも、大久保らしいいきちやうめんな性格があらわれているといえるのかもしれない。

かつて、大久保の内面では、おゆうもます女も、石薬師の家も鹿兒島の家も、同格の自分の家であり、同じ△妻▽なのであった。彼の政治生活のサイクルは、そうあることをむしろ必要としていたし、また何ら不自然を感じることもなかったのである。

しかし彼が西郷隆盛を追放し、明治政府の最高指導者たることを自覚した時、彼は鹿兒島の妻子を上京させることによって、故郷鹿兒島と訣別し、帰宅する△本邸▽と、行く△別邸▽とを、公私ともに画然としなければならなかったのである。



講演



開所記念講演（昭和五十二年度）

十一月十五日
於 楽友会館

全国水平社の福岡連隊

「爆破陰謀」事件

渡部 徹

一九二六年一月より九州連合会により組織的に展開された歩兵二四連隊に対する差別糾弾闘争は、何度か連隊当局を窮地に追いこみながら、結局一月二二日、官憲のデッチ上げた「連隊爆破陰謀事件」で、松本治一郎以下、関係者の一斉検挙により、圧殺されたことは周知のとおりである。

たしかに権力の理不尽な弾圧であり、権力側をいくら非難しても、非難しすぎることはない。しかし、同時に、運動のがわに、権力に乗ぜられる隙がなかったかどうか。この点、これまで検討されたことがないが、結論的には三つの重大な失敗があった。

第一は、七月三日、憲兵隊長の仲介で「融和促進講演会」開催で妥結をみたのが、破棄された点に關してである。これは周知のように、全水総本部理事木村京太郎が連隊の「謝罪講演会」開催で「勝利解決した」との通報を流した結果である。解決条件を当事者から確認せずに、主観的判断だけで書いた木村の大きな失敗である。

第二は、九州連合会ただ一人の書記岩尾家定の動向である。岩尾は闘争最中の八月にも心中未遂で任務を放棄し、九月六日、突如、誰一人知る者もなく、クートベ入学のため姿を消し上海経由で訪ソしている。その上、八月末熊本に清住政喜を訪ね、ピストルかダイナマイトの入手方を依頼しているのである。その結果、清住は岩尾の真意をただすため、九月上旬、岩尾失蹤後に、岩尾宛に入手可能、金送れの手紙を出し、これがスパイを通じ警察に手に入り、「爆破陰謀」をデッチ上げる端緒となっている。客観的には岩尾が挑発者の役割を果たしている。

この頃、糾弾闘争は、一〇月七〜一四日の射撃検閲演習での連隊による宿舍差別事件を惹起した時だけに、連隊は絶対絶命のピンチにおかれていた。岩尾宛の手紙がなければ、闘争圧殺はきわめて困難であつたであらう。

第三は、当時の状況下では責めるのは酷であるが、若干の弱年の被検挙者が警察の威嚇・誘導で虚偽の自供をさせられたことである。これは岩尾の依頼の線によるピストル、ダイナマイト入手が取調べの結果、架空と判明し、事件デッチ上げが困難となつたため、松本以下の共同謀議による連隊へのデモ・襲撃に筋書を変えざるをえなくなつたのに応じ、これに見合う自供をさせられ、これが有罪判決のきめ手とされたのである。運動のがわのミスはミスとして、きびしく指摘して、この糾弾闘争を正しく総括する必要がある。(詳細は福岡部落史研究会「部落解放史ふくおか」第一号、拙稿参照)

中国のアナキズム

森 時 彦

中国のアナキズムという題目をかかけると、一般的には老荘思想を連想される向が多いであらうが、きょうは中国近代、とりわけ辛亥革命前後におけるアナキズムの役割を概観してみたい。

人文研の前身である東方文化学院京都研究所が開設された昭和五年は、今出川の進々堂が店開きした年でもある。その初代バーテンダーは、むしろ中国のアナキストと深い関係をもっていた人物として有名な山鹿泰治であつた。

かれは前後四回中国へ渡り、李石曾、吳稚暉をはじめ、沈仲九、黃凌霜等と接触をもつた。昭和二年には、上海郊外の江湾にあつた労働大学でエスペラントを教えたこともある。その経歴の中でも、中国近代の最もすぐれたアナキスト劉師復との親交は特筆に値する。

劉師復は、もと中国同盟会に属し、民族革命のために清朝の大官暗殺に従事したが、辛亥革命後は、クロボトキン流の無政府共産主義を唱え、その宣伝雑誌『民声』(最初は啼鳴録)を発行した。山鹿はそのエスペラント版の発行を援助したのである。

近代中国のアナキズム運動において、劉師復が重要であるのは、第一に本格的な運動はかれを始祖とする、第二にかれの思想と行動が五四時期のアナキズム運動に決定的な影響を与えた、という二つの理由から

である。

かれの思想の特徴は、クロボトキンの無政府共產主義をもっとも崇拜すること、ストイックな面が非常につよいことにあるが、それは、半封建半植民地中国の現状に根ざしていた。

かれがクロボトキンを好んだのは、その「科学性」の故であろう。帝國主義侵略の理論的根拠であった社会ダーヴィニズムを論破するうえで、クロボトキンの相互扶助論は、当時の中国人に与えられた唯一の「科学的」反論であった。

また、個人道徳の強調も、未来の理想社会における徳目であるとともに、当時の中国社会においては、腐敗した旧道徳との訣別というより現実的な意味をもっていた。

五四時期の先進的な青年たちが、一度はアナキズムの洗礼をうけた事実からしても、近代中国におけるアナキズムは、啓蒙思想として多くの青年たちを社会変革にたちあがらせ、さらにマルクス、レーニン主義の受容へと導いていった過渡的理論であったといえるであらう。

退官記念講演

三月十一日
於分館講堂

日本文化のあゆみ

林 屋 辰三郎

わたくしは、日本文化のあゆみには、大きく云つて二つの力学が作用しているように考える。その一つは大陸から日本へ及ぼすヨコの関係である。それは日本文化の流れに、大陸すなわち中国―朝鮮の政治・経済・文化の情勢が、一時期後れてはば並行的に運動していることである。日本人の生産の基本方式にも、貢納（在宅して生産物を上納する）と上番（出勤して官営工場で生産する）という二つがあるが、後者は大陸から渡来したものであった。また日本文化は中国との貿易の展開する時期に対応して、新しく発展していることも指摘されるであらう。

もう一つは、日本文化の生み出されるに際して、日

本社会の支配・被支配のタテの階級対立のなかで、その接点に位置する人々が文化のにない手になるという関係である。古代の渡来人もそうだが、王朝時代の受領（地方官となつた下流貴族）、室町時代の土倉（高利貸業者）、江戸時代の仲間（商人の職種別の組合）など、いずれもそうした立場に置かれていたように思われる。

この二つの力学は、国際的と国内的との二面で日本文化のあゆみに影響を及ぼしたが、最後に綜合して近代日本を論ずるならば、従来余りに鎖国を強調して、その結果明治における西洋文明の移植ということに力が置かれていたが、わたくしは鎖国の間にも、中国・オランダに対する窓口から、かなりの科学的な知識が流入しており、むしろ自生的なものを重視する必要があると思う。とくにこの点については、研究所在職中の共同研究「日本における市民文化の形成」において七ヶ年に亘つて討議したところであり、本年秋刊行予定の「文明開化の研究」をふくむ三部の報告によって、最終的に評価していただくこととなるう。

要旨は以上につぎるが、その全速記と当日会場の都合で一部割愛した部分をも復元し、「国際交流と文化のにない手」という副題を付して、「展望」昭和五十三年六月号に登載していただいた。顧みると、わたく

しは昭和四十五年就職に当つての夏期講座の講演も「日本文化の東と西」と題して「世界」昭和四十六年一月号に登載されたが、両度とも河野健二所長のご高配によつて実現したものであり、まことに有難く感謝している。

なおこの退官記念講演は、昭和五十三年三月十一日、京大人文科学研究所分館講堂に於いて行われた。予想以上に多数の参会者があり、これもまた深く感激した次第である。

夏期講座

八月一日～三日
於 分館ロビー

文化接触の視角

吉田 光 邦

文化接触 (Cultural Contact) の語は、最近かなりジャーナリティックに用いられ、多くは文化の担い

手としての人間が、他の異質の文化にふれた時の反応または行動として、考えられている。けれども文化の接触は、はたしてそれだけにとどまるものなのか。それはやはり文化史を考えるなかでの一要素として、その意味と内容を明確にとらえておく必要がある。

文化接触とは人間にとつては世界認識の拡大であり、自己確認の一方法である。このとき人間自体の所屬するさまざまな文化体系と、それに対応する異文化体系との、相互の座標の確認と価値系の評価が行なわれ、時としては価値系の改変を迫られることがある。それは第二次大戦後の日本の例にも明らかであろう。

そこで接触の方法を考えよう。第一は戦争や旅行による文化体系の衝突と評価である。こうした例は古代以来、東西ともにその例を発見することができる。しかしそれも評価にまで至らず、単なる比較にとどまることも多い。古くからある東西あべこべ論の系譜はそのひとつである。

これについて物媒介の接触がある。それは「これは何か」という疑問にはじまり、そこから形、機能の発見と評価が生れ、やがて技術の交流現象をみちびきたす。技術文化の伝播と交流にはこの例は多い。

さらに言語と文章による間接的接触がある。ヘロドトスの「歴史」、中国の数多い正史にみる、非中国文

化圏の記事などはその好例である。これらはまずニュースとしてはじまり、ついで情報にまで体系化される。これは時にはイメーシ（図絵）によって表現される場合も多い。すなわちこの間接的接触には、各種の情報メディアの十分な発達を必要とするという前提条件がある。

このように文化接触は異文化の発見による世界の拡大として働くが、その異文化は決して空間的なもののみではない。むしろ閉じた系のなかに生きていた人びとにとっては、同質とみられる文明の系のなかにいても、階層の差による異文化の発見があった。それは宮廷貴族、ことにバロック的宮廷世界でそのいくつかの例がみとめられる。それは階層の認識であるとともに、しばしば世界の拡大としても作用した。文化接触と文化の受容、その異同は日本の文化史を考える上では重要な視点とみられる。

三浦梅園の自然哲学

山田 慶 児

三浦梅園は『玄語』のなかでおびただしい図を書い

ている。かれは考えながら図を書き、図を書きながら考え、そして図を見ながら文章を書いた、とわたしは思う。かれにとって図と文章は決して切り離しえない、『玄語』の二つの構成要素だった。そして、図はかれの思考法の端的な表現だったのである。梅園の図は、ただ一つをのぞいてすべて円形であり、また、ただ一つをのぞいてすべてシンメトリーをなしている。それはかれが、世界に存在する物や現象はすべてシンメトリカルな構造をもつ、と考えていたことをしめす。かれの哲学は、いわばシンメトリーの哲学というべきものであったのである。

シンメトリーをなすものは、群論のことばによってその構造を分析することができる。梅園の図はいずれも二面体群の構造をもつ。とりわけ、基本的な世界構図は位数二の二面体群である。それは東と西、南と北、あるいは、上と下、左と右をとりかえても、世界の構造は不変であることを意味する。それは静的な、均衡にみちた、不変的な世界である。

世界が二面体群の構造をもって立ち現われるのは、梅園が厳密な二分法の原理を適用したからである。それは『易』の陰陽原理に由来するものであった。かれは二分法を破る五行説を真向から否定し、陰陽説のみにもついて気の哲学を再構成しようとした。そして、

壮大な自然哲学を構築したのである。かれの哲学は、その意味で、陰陽哲学の究極的な一表現、その思考法を厳密に適用することによって到達された、その歴史的発展の最後の表現であった、ということができよう。

かれは自然哲学者であって、自然科学者ではなかった。かれにとって、関心はあらゆる対象のなかにシンメトリカルな構造を発見することであり、その対象がいかなる構造をもつかを探究することではなかった。しかし、それは一種の徹底した合理主義であつた。そして、こうした合理主義は容易は近代科学の合理主義に移行できるものであったことを、忘れてはならないだろう。

三浦梅園はいまだに読み解かれていない思想家であるが、かれの思考法、そのきわめて単純な構造を把握するならば、わたしたちは『玄語』の世界に大きく接近することができる。梅園における「獨創性」とはなにかを、理解することができるのである。

東トルキスタンの詩人と歴史家

浜田 正 美

ムッラー・ビラール。通称ビラール・ナーズイム（ナーズイムは即ち詩人の意）。天山の北、イリ谿谷はグルジャの人。一八二四年生れ。一八九九年没。通称の如く、ウイグル族最高の詩人であつた。その作品には、およそ百編の詩からなる「抒情詩集」^{ガザール}、一八六四年の反清闘争の開始から、一八七一年のロシア軍によるイリ占領までの事件を記した、歴史詩「中国に対する聖戦の書」、及び口承の叙事詩をリライトした二編の長詩がある。その抒情詩は、ペルシャ、トルコの *erotic-mystique* な文学の伝統に忠実に、「地上に於ける神の影」たる、完全な美を備えた恋人に対する愛をうたったものである。すなわち、詩人は、神に対する神秘主義者の愛と、現実の肉体を備えた恋人への愛との両義に解し得る危い境地で、詩の技を発揮する。彼は又熱心な記録者でもあつた。自ら反清闘争や、反乱勢力の内訌に参加しつつ、目撃したこと、伝聞したことをノートに採っていた。彼にとつて、歴史は神の意志が顕現してゆく過程に外ならなかったが、同時に「すべて人がことを行えば、意味が無いということはない。その意味を知ることが我らの玉座である」というのが、彼をして彼の現代史を書かしめた信条であつた。

ムッラー・ムーサー。天山南麓、サイラムの人。生

没年不詳。但し、自ら述べるところに従えば、一九〇三年に七十才ぐらい。この年、「平和の歴史」^{フレイム・アムニヤ}なる歴史書を完成する。ムーサーは、アラブ語、ペルシャ語にも通じ、恐らく当時、東トルキスタン第一の知識人であつた。アジアの最奥部にありながら、彼は中国本土の事情にも通じており、不信者たる「インギリス（英人）」や「フランク（ヨーロッパ人）」が、大清皇帝の領土を桑食し為に新疆への口糧が滞り、現地の官吏による収奪が、益々苛酷になつたこと、そして、このことが、反清闘争の原因になつたことを的確に誌している。ムーサーは、「世界の表と人々の口に」名声と榮譽を留めることに執心していた。終章に付した四行詩に言う、

「わが生命終りに近ずきたり。されど名声は世に出でず。

我、不公正と無視とのうちにて過したり。嗚呼、名声あれかし」と。

論理と戒律と儀礼

上山春平

私は、明治以降の西洋哲学の受け容れ過程をふりかえってみて、論理学というものが、この国では大へん根づきにくい、という印象を受けてきた。

西田哲学やマルクス主義が広く迎えられたのは、さまざまな理由があるにはちがいないが、「無の論理」とか「弁証法」といわれるものが、論理の名を借りながら、西洋のフィロソフィアの伝統の中からつむぎ出された論理の本来の姿を否定することを正当化する方向をはらんでいたからではないかとも思われる。

哲学の受け容れ過程における論理の欠落にきわめて似通った現象として、私がかねてから着目しているものに、仏教思想の受け容れにおける戒の欠落、儒教思想の受け容れにおける礼の欠落がある。

哲学における論理、仏教における戒、儒教における礼といえば、たとえば生物における遺伝子のように、それぞれの思想形態の独自の秩序と形を再生産するためのぎりぎりの条件を示すものではないか。それらは、それぞれの思想形態を生みだした文明のエッセンスを集約したものではないか。

日本の文化的風土には、外来思想の受け容れの過程で、そういうソリッドな核のようなものを溶かして欠落させる傾向があるのではないのか。私は、こうした傾向にたいして、「負の創造」とでもいふべき一種の

オリジナリティをみつめたい、という思いをいだいている。

仏教における戒の欠落の過程は、最澄の小乗戒切り捨てにはじまり、法然を介し、親鸞に至って、無戒思想にまで徹底される。タイやビルマに小乗戒を至上とする仏教が現存していることはよく知られているが、中国や朝鮮などの大乘仏教圏でも、小乗戒の切り捨てさえ、プロの僧侶としては考えられないことだ。

儒教における礼の欠落については、本研究所における朱子の共同研究で、朱子の礼学を分担することによって確認することができた。江戸時代には、朱子学が「正学」とされていたもののに、朱子の晩年の労作『儀礼経伝通解』についてはほとんど研究らしい研究がないばかりか、李朝の朝鮮において冠婚葬祭の基準とされて深く生活に根づいた朱子の『家礼』も、まず、文献的研究がきわめて不十分であり、また、全く生活に根づくことがなかった。この事実、仁斎から徂徠をへて宣長へ、といった学問的関心の変容の過程と無縁ではあるまい。

中世大学の形成と知識人

田中 峰雄

十二世紀末から十三世紀中葉にかけて、ヨーロッパのいくつかの都市に、学位とカリキュラムをもった新しい型の教育、研究機関としての大学が出現し、その後の西洋大学形成史の嚆矢となったが、このことは、当時における学知と知識人の状況と密接に絡み合っている。

ひとつには、知的営為の職業化。十二世紀を通じて、知的成果の教授がはじめて職業として自覚され、ル・ゴッフのいう「中世の知識人」の成立をみたが、彼ら知識人たちは、おのれの知的活動を一般職業人の活動と同一ジャンルにとらえ、それらとバラレルに、マギステル（――親方）の用語をもちい、バシユリエ（――職人）の身分をもうけ、また、品質や販売数量を規定するごとく、カリキュラムや修学年限を定めた。この点で、中世大学をそれ以前の教育機関から峻別する「学位」「カリキュラム」は、職業人としての自己の地位の排他性、安定性を期した知識人たちの、

自意識の結果するものであったとも考えられる。

しかしながら、中世知識人にみえる一般職業人との類縁性の自覚をのみ強調することは、明らかに片手落ちとなろう。彼らは、一方でたしかに、他の職種のリドル化と軌を一にして知的教授者のギルド（大学）を形成したが、他方、知的営為の尊貴性というきわめて強い自負心をもっていた。学の探求こそ最高の人間的営為であるとの自負は、それがひとつの「階級的」信念となりうるゆえに、大学知識人の共通了解ともなり、パリ大学は、全地表を潤す源泉をもつ最高の頂に擬せられることをはばからなかった。知的労働に従事するゆえにいつさいの肉体労働を免れうるとした十三世紀知識人は、肉体労働を主要徳目とした前代の知識人集団としてのベネディクト派修道士にするべく対立して、肉体労働を蔑む視点を獲得してしまっている。制度としての大学がもっている、知識人の特権意識の所産としての性格も、また無視することはできない。

第三に、職業としての知的活動という考え方は、大学内の教授活動のみならず、知の効用に著しく社会的功利性をつけ加えることになった。社会的上昇におけるキャリア形成に、大学は重要な意味をもつことになる。また、ゴシック字体の普及や、いわゆるペキア・システムによる知の量産体制の成立は、活字印刷術以

前の出版のあり方に革命的な位置をしめているが、このことは、法学や医学の隆盛とともに、大学という制度において、知と知識人の関わりに、新しい状況をつ

くり出したものともいえる。

(注) 飛鳥井雅道氏の夏期講の座要旨は「人文学報」四七号に同一テーマの論文が掲載されるので省略した。

お客さま

五三年三月三十一日

メキシコ大学アジア・北アフリカ研究センター長 (イスラム史の研究者)

マニユエル・ルイス氏

四月一四日

イギリス ケンブリッジ大学教授

ペリンダ氏

経済学会と共催。

「チャール・マクドナルド・アトリー」

と題する講演がなされた。

四月一五日

カナダ ヨーク大学教授

ジェローム・チエン氏

八月一日まで四ヶ月にわたり滞在し、

「民国初期の文化と社会」「現代中国」の二班に常時参加されたほか、文学部で十五回に及ぶ「中国近代軍閥史」と題する中国語による講義をされた。

四月二一日

中国仏教協会友好代表団の王音・顧復生

両氏が四月二二日午前一時、東方部を表敬訪問された。

四月二七日

中国仏教協会友好代表団団長 趙樸初氏

六月一四日

国立コスタリカ大学学長

コラウディオ・グチエレス氏

人のうごき

○御牧克己助手(東方部)は、五二年二月二日羽田発、ベナレス・グラムサラ

市内等で仏教徒の生活意識調査及び教主との会見を終え、五三年一月一九日帰国。

○熊倉功夫助手は、五二年二月一六日羽田発、裏千家サンフランシスコ・ロスアンジェルス支部等で茶道社会調査を終え、五三年一月一日帰国。

○山田慶児助教授(東方部)は教授に昇任。(五三年四月一日付)

(五三年四月一日付)

○林屋辰三郎教授(日本部)は停年退官、京都国立博物館長に昇任(四月二日付)。

次期所長に河野健二教授が就任(四月一日付)。

○中村賢二郎教授は、文部省在外研究員として五三年三月一日羽田発、オーエンハイム農業単科大学、チェーリッヒ大学、ローマ大学等で宗教改革運動の研究を終え、同年五月一日帰国。

○梅原 郁助教授は、日中青壮年中国研究者訪中国の一員として、五三年三月二九日羽田発、広州博物館、湖南省博物館、馬王堆等で、中国社会の調査及び学術界との交流を終え、同年四月一四日帰国。

○樋口謹一助教授は、第六次訪中国員として五三年四月三日羽田発、復旦大学、人民公社労働者アパート、広州博物館等で中国社会の調査及び資料収集を終え、同年四月一七日帰国。

○大前 眞助手は、五三年四月二日羽田発、オックスフォード大学、パリ大学等で日英勞使關係比較研究を終え、同年六月一八日帰国。

○樋口 謹一助教授は、五三年四月二〇日羽田発、北京大学、清華大学、上海電機工場等で中国社会の調査及び學術交流を終え、同年五月七日帰国。

○熊倉 功夫講師（日本部）は筑波大学（歴史人類学系）助教授に昇任。（昭和五三年六月一日付）

○上田 篤教授（大阪大学工学部・長尾龍一助教授（東京大学教養部）は比較文化部門（客員）に併任（五三年八月一日～五四年七月三十一日）。

○秋山 元秀助手（東方部）は辞任の上、愛知県立大学講師として転出（昭和五三年一〇月三十一日付）。

○谷 泰助教授、松井 健助手は、五三年六月一七日伊丹発、カープル・ベオグラード・ブカレスト周辺等でユーラシア西南部有畜社会の比較文化的研究を終え、谷助教授は同年一二月一日帰国、松井助手は同月二六日帰国。

○河野 健二教授は、五三年六月二〇日伊丹

発、ニース大学、パリ第三大学、第二次世界大戦史委員会等で二〇世紀日仏比較史的研究を終え、同年七月一三日帰国。その間、渡部徹教授（日本部主任）が、所長を代行。

○江村 治樹・田中 淡阿助手は、京都大学中央アジア學術調査隊員の一人として五三年七月二二日伊丹発、テヘラン・カーブル・ペシャワール一円等で、中央アジアの考古学的調査を終え、同年一月三日、田中助手は一〇月三十一日帰国。

○飯沼 二郎教授は、五三年八月一四日成田発、マドリッド近郊等で農業調査、ノイブランデンブルグ市内で国際農業博物館第五回會議に出席し、同年九月二〇日帰国。

○多田 道太郎教授は、五三年八月八日伊丹発、パリ・マドリッド・エジンバラ近郊等で社会調査を終え、同年九月一六日帰国。

○吉田 光邦教授・池田 秀三助手は、五三年一〇月六日伊丹発、陝西省博物院、龍門石窟、中国社会科学院で文物・歴史に関する調査を終え、吉田教授は同二月二〇日、池田助手は二一日帰国。

○川 勝義雄教授は、五三年一月七日成田発、リヨン・リスボン・マドリッド大学・フランス国立博物館等でヨーロッパにおける漢籍の所在調査の爲、京都大学創立七〇周年記念後援会助成金受け赴任、五四年二月六日帰国予定。

本のうわさ

林屋辰三郎編 『幕末文化の研究』

(A5版、五五一頁、年表索引付、岩波書店)



本書は共同研究「日本における市民文化の形成」の第二期研究報告である。すでに第一期研究報告として『化政文化の研究』が刊行され、第三期研究報告として『文明開化の研究』が準備されている、と聞く。共同研究の一サイクルが終れば研究報告が出るのは当然のことながら、五年がかりで昨年ようやく研究報告を刊行にこぎつけたわたくしどもの班からすれば、まことにうらやましい健筆である。八年間に三冊の研究報告をまとめられた林屋先生と班員諸氏に敬意を表したい。

この書物は、幕末文化研究序説という副題をもつ林屋論文に始まり、幕末文化のもつ特質として、(1)私塾の教育を基礎に情報

文化とでもいふべきものが生まれ、国家の構想がしきりに語られたこと、(2)開国Ⅱ貿易によって産業文化が生まれそれが芸術に擬せられるようになったこと、(3)在野的存在として草莽の志士がおり、その究極に奉公があつたことが指摘される。そしてその文化の一表徴として「奇」と「異」があり、それは鎌倉の「ばさら」、室町の「かぶき」にも通ずる美意識として、三つの幕末に通ずる精神である、という。

序説の幕末文化についてのこのような認識が必ずしも全篇につらぬかれてはいるわけではないが、(1)の情報文化については、これを専論した二つの論文があるほか、執筆者のほぼ共通した認識として押さえられ

ている。

しかし一読して、幕末文化なるもののイメージがいまだ十分に定着しないように感ずるのは、幕末文化そのものが、われわれのもつ造型的イメージからはほど遠く、吉田論文の言葉を借りれば「化政期に成立した文化としてのシステムを見失ったままに拡散し続けた時代」だったからなのだろうか。

この書物を読みながら、わたしの頭に去来したのは、このような文化をもつ時代を、中国について考えてみるならば、どうなるだろうか、ということであつた。むろん時代的には清末であろう。しかしいさか我田引水的にいえばこうした状況はすでに明末にある。当時、書院や結社が流行するが、この時代の危機感のなかでこれらは政治的傾向を深め、「経世の学」として構想がしきりに語られる。しばしばルソーに比定される黄宗羲の『明夷待訪録』はこのような時代の産物である。さいきん再びこの時代の研究を始めたいと思つている私にとって、幕末文化のもつ特質は、変革期における文化のあり方を考えさせてくれる大きな刺激になった。この「拡散」の文化のあとに生れる「文明開化」の研究に期待したい。

(小野和子)

竹内 実『魯迅遠景』

(B6版、二五〇頁、田畑書店)

「中国の一九三〇年代と魯迅」という講演会の録音を文章にした本書は、非常に気持よく読むことが出来た。もとより私には、魯迅について特別の関心があるわけでも、三〇年代の中国に普通常識以上の知識や持論があるわけでもない。有様は、私が竹内氏に対して淡い恋着の情をもっていたことにある。もっとも、私は竹内氏の著書なるものを一冊も読んだことがなく、氏に対する私の理解の程度は、週刊誌・月刊誌に書かれた文章と酒席での短い会話(話し込んだという記憶は一度もないが)、さらには街角で出会った時の(これは、なぜか何度もある)氏の風貌などによるものであり、それ以上のものでないことはここで断わっておかなければならない。

私は革命願望というある意味では曲がることなき素直な感情に身をまかせたことのない不幸な人間であるために、革命的知識人、あるいはそれについての議論に全く関

心がなかった。食わず嫌いであったということだが、たとえば魯迅。中国革命の先駆者↓日本における革命的知識人との交流↓革命的文学と、なぜか、走馬燈のように私の連想の環が循環してしまふ。

『魯迅遠景』は、このような私の魯迅に對する理不尽な連想をやさしくたしなめてくれているようだ。そこにはなんの手品もない。中国文学研究者である竹内氏が、文学研究の当り前の手法で、魯迅の家の歴史や、郷里である紹興を語り、このようにして成長していった魯迅の想念がしだいに「硬質」の文章へ結晶していくさまを描いて

くれるだけなのだ。断定がない、魯迅の革命に對する態度はもちろん論じられているが、竹内氏の革命論はない。魯迅のなかにある中国民衆に對するアンビイパレンス。実現の行動においては消極的であり、受動的にも見える行動の中に見え隠れする「熔岩」のように熱いなものか。人間とはそういうものだと竹内氏は言いたいのである。わりきれないものはわりきれないのだ。政治論では理解できない魯迅の心底を、故郷紹興を「愛」した土着性の強い文学(と著者は魯迅の文学を評するのだが)を通して明らかにしてくれる竹内氏もまた、日頃の皮肉屋の口ぶりにもかかわらず、中国とそのもとにある民衆を、ひとかたならず「愛」していることゝ確認するのは私の深読みであろうか。

(園田英弘)

小野和子『中国女性史』

(B6版、二八四頁、索引付、平凡社)

「女性史」って何だろう。書評を押しつけられて困っていたが、とにかくそんな疑

問がわいてきたので読み出した。ところが、読み進むにつれてしんどくなり、途中で何

度も放り出したが、まがりなりにも最後まで読んだのは、生まじめな著者に申し訳な
いと思ったからである。

しんどの理由は私がどうも本書で再三批判されているアナキスト的小状況主義、ブルジョアの個人主義の方に近いからである。私は「同族主義、迷信的な考え、不平等な男女関係の破壊は政治闘争に勝利してのち、おのずから得られる結果である」という毛沢東の言葉に疑問をいだき、土地改革と平
行して進められた新婚姻法の実施にあつて、「婚姻は社会国家と無関係な私事ではなく、社会国家の構成員たる男女の公私の利益の統一されたもの」という立場で、「積極的に個人に関与」する人民政府こそ封建的だと思う。つまり、国家が社会を駆使することに反対なのである。「女性史」とは、国家権力の掌握をめざす共産党が推しすすめる階級闘争に参加するアマゾンネスたち、あるいは彼女たちの祖先（著者はこれを太平天国の女軍に求めている）を祖述するものだろうか。もしそうならば、わざわざ「女性史」を名のる必要はないと思う。
文化大革命時の「時代は変った。男女ともに同じになった、男の同志にできること

は女の同志にもできる」という毛沢東の言葉を、著者は「階級社会のなかで劣れる性であることを強いられてきた女の歴史にとつて、ほとんど革命的というほどの重みをもつ言葉だ」、「一国の指導者が、劣れる性としての女の役割の固定化をはっきりと否定し、社会の輿論をその方向に組織しようとした、などということがあつたのだろうか」と高く評価しているけれ

飛鳥井雅道『西郷隆盛—維新回天と土族共和の悲劇—』

（A4版、八二ページ、平凡社）

みごとに絵本です。この本を絵本という
と、飛鳥井さんはいへん機嫌が悪いのですけれども、そこがどうもわたしにはよくわからない。ひょっとすると飛鳥井さんの心のどこかに、絵本なんてくだらぬ、絵も図も写真もない、文字の延々たる長蛇の列だけが学問だ、といった気持がひそんでいるのではありますまいか。とすれば、それはこの本の著者として唯一の瑕疵といふべきでしょう。

わたしはこの本を読んで、大げさにいえ

ども、権力者にそう言われなければならぬ
いような弱体な社会の方こそを問題にすべきではないだろうか。家事労働の社会化、女の経済的自立、これはすばらしいことだが、それを権力者の言葉ではなく、みずからの言葉で守る自由な女たちはどこにいるのだろうか。

最後に人名地名等にはカナをふっていた
だきかかった。（松田 清）

ば、がっくりしたのです。いつもいわば図
本ばかり書いているものですから、いつかは絵本を作ってみたい、というのがかねが
ねわたしの念願でした。ところが、その夢もこの本にぶつかってあっさり離破したみたいなのです。なぜとって、西郷隆盛は錦絵になっても、科学史の対象は錦絵になろうはずがないではありませんか。まことに、絵本を作る歴史家、絵になる対象
を選んだ歴史家は幸なるかな。
わたしのみるところ、この本の主人公は

どうやら錦絵です。もつと正確に言えば、錦絵になった西郷隆盛です。飛鳥井さんはおそらく、その錦絵を文章にしたかった。

そして、それをたれよりもあざやかに果たした。みごとな絵本、というゆえんです。

西郷の錦絵は、この本も半ばを過ぎた四六ページに、「征韓論」としてはじめて登場します。また、そうあるのが当然です。錦絵は勝者のためのものでなく、あくまで敗者のためのもの、敗者にささげる民衆の鎮魂歌にはかならないからです。同時に、飛鳥井さんの文章もますますさえてきます。

いったい、飛鳥井さんの文章は、ときにふいに乱れたりすることもあるのですが、この本にかぎっていちぶの乱れもありません。巻末へ近づくにしがって、錦絵は数を増

し、迫力を加え、最後の章「西郷星」にきわまります。

星になって民衆を照らす西郷、それはもはや純然たる錦絵の世界であり、それ以外にありようのない世界です。そしてそれが、飛鳥井さんにとっての西郷なのでしょう。西郷伝説のなかに西郷をみる、それは民衆のなかに西郷をみることです。もつとも錦絵のなかで、怪魚にうちまたがつて竜宮に攻めこむ西郷の敵が清軍であったり、西郷の帰還する船がロシア軍艦であったりするのはいささか気になりますが、それはむしろ飛鳥井さんのせいではない。ともあれ、この本が飛鳥井さんのいちばんいい仕事のひとつであることは、疑いを入れられません。

(山田慶児)

山下正男『植物と哲学』

(新書版、二〇〇頁、中央公論社)

さきに著者は『動物と西欧思想』の一本を上梓した。それは思想というものは、単なる観念的な操作によって生れるものではなく、具体的な事物のイメージからつくら

れるという命題を、動物を例として証明しようとしたものである。そして著者はこんど植物を具体的事物としてとりあげ、そこから哲学が導き出されることを著者は論証

しようとした。そしてこの手法が一般性をもつことを同時に検証しようというのである。

たしかに観念論的な場であろうと、存在論的な場であろうと、人間は古くから植物ないし動物についてのアナロジーを利用して、人間そのものや、歴史あるいは哲学、宗教といった観念的世界を構築してきたことはまちがいない。著者が東西にわたる文献から抽出してきている、多くのアナロジーの実例はそれを物語るし、これ以外にも多様な例証はいくらも考えられよう。

しかし問題はそうしたアナロジーは、どこまでも思想への入口をしめすのみであって、その思想を体系化してゆくものではないということにある。プラトンもアリストアレスも、人間と植物を対比させてしかも異った立場を考え出した、ということは、対比という事実のあとから生みだされてくる体系は、もはやアナロジーの立場を離れてしまったことをしめすものではないか。またイエスははじめ多くの宗教者はまた植物を例として説いた。けれどもそれらはどこまでも現実から神の国への入口を指示するために用いられたのであって、決して神

の国そのものではない。読み進んでゆくと、多くの例が次から次へと提示されていて面白いことは面白いけれど、それが多くの思想の独自性とどうかかわるかは、どうも不透明なのである。

最後に著者は農業社会、工業社会の哲学の差異を述べ生態学の重要さを説く。しかしこのあたりはいささか性急、もっと論じこんでほしいところであった。

(吉田光邦)

樋口謹一『ルソーの政治思想』

(A5版、二七一頁、索引等付、世界思想社)

フランス流の自由民権思想は、明治憲法

発布いらい為政者にとって好ましくないものだったとしても、その核心が先進的な人びとによってうけつがれたことは歴史的な事実であって、そうでなければ、ルソーの著作が戦後に盛行することもなかったにちがいない。わが研究所の金看板たる共同研究の最初がルソーの研究であったことは、その時代風潮の先河を開き、それに学問的なささえを与えたものとして誇ってよいことだろう。

ところで樋口氏はその最初のルソー研究から参加されて重要な役割をはたされた方なのだが、それはいはとんど三十年にわたる苦心研鑽の業績の一端を本書にまとめ

られた。

論文は八篇、巻末にかなり詳細な著作・参考文献目録と年譜が付されている。くわえて「ルソーの政治思想の理解においてかなめとなる若干の文章」が原典紹介という形で収録されているが、これは著者の論敵にたいする対抗意識のあらわれなのだろうか。

一読して面白かったのは、ルソーが理想社会(緊密な社会)を構想するにあたって「三角関係」を一「祖型」としたという指摘である。この祖型はバトリオチズムの分析にもかかわる重要性をもつもののなかで、かれの思想の核心である「人間は生まれつき善いものであること、人びとが悪くなるのはただ社会制度のためであること」との

テーゼをヴァンセンヌの森での「靈感」として得た天才的思想家ルソーにして、その靈感を思想に構築するのに、自分の生きたもつとも切実な関係を基礎にせざるを得なかった、というのだからである。ただ、ルソーの三角関係とは自分が家政のきりもりに責任をもたないという疎外された形でのかわりかたと見えるのだが、もしそうなら、それは「緊密」な連合を確立するためには自由平等を獲得せねばならぬという関係を原初的にはらむものであった、とまではいえないのだろうか。もちろん、これは実事によらざるの空言なのだが。

叙述は平明で分りやすいが、望蜀の言をのべれば、シェルドンを使ったルソーの氣質評点など、表は詳細だが説明は結論の一行だけというような不親切な点もないわけではない。

門外漢のわたしには、いうまでもなく専門的評価はできないので、その点は平岡昇氏の「著者のルソーへの親近性と深い蓄積が感じられる力作」、「日本におけるルソー研究の一つの水準を示すもの」との評価(十二・十、朝日)にのっかって、責任のがれをさせていただきたい。(狭間直樹)

柳田聖山『夢想』（『日本の禪語録』七）

（B6判、三九四頁、講談社）

答え、「天津橋上から、役人の交替の時報がきこえるぞ」

京の庭は、私の最も愛する芸術の一つである。日本人の達成した最高の芸術的表現といえるだろう。文学が文字による思想の表現であり、音楽が音による思想への表現であるとすれば、京の庭は木石による思想の表現である。したがって、その思想を理解することなくして、京の庭は理解できないはずである。たとえば、わが愛する苔寺は、どのような思想の表現なのであろうか。

略、「夢想が現代の読者に直接語りかけてくる感覚が把握できるよう工夫した」と柳田先生は書いておられる。

問い、「大恵禪師は言われました、『大地のうえに果上座^{やうしやう}が一人いるだけだ、君はその俺をみている』。どういうつもりでしょうか」

答え、「帯で美人の眉をかくようなものだ」

問い、「今、誰かが和尚に同じことを問うたら、何とお答えになられますか」

答え、「俺が打つ、王の穴場をふさがないでくれよ」

問い、「大恵の答えにくらべて、変りばえしませぬな」

答え、「山上の路は、登ってみなければ判らぬものだ」

問い、「法が法の後について広がって行って、いたるところに法の旗がおっ立つというのですな」

それはそうにちがいないとは思うのだが、私のような全くの門外漢にもわかるように、もう少し平易に説明していただけなかったものであろうか。

（飯沼一郎）

多田道太郎ほか編『クラウン仏和辞典』

(B6変形判、一四七〇頁、三省堂)

外国語との対訳辞書をつくる仕事は、それほど面白いものとは言えないだろう。なぜなら、たとえば *bon* を説明して、「嗅覚の器官たる、顔面から突出した、ピラミッド型、かつ三角形の部分」(フチ・リトレ)というのか、それとも、などと思ひ悩むその必要さもなく、素気なくただ「語」鼻」と書くことだけが、その仕事をする人たちには求められるのであり、たとえば私にとって辞書をつくる楽しみというものがあるとなれば、それは鼻そのものを、どういう風に表現するかという所にこそあるのだと思えるからである。

そういう楽しみとはあまり縁のない、こうした対訳辞書をつくる仕事は、だから大変しんどい。しんどい臭くて、しかも重要で、だから、しんどい臭いといって手を放したりすると、本当に大変なことになる、という種類の仕事である。

多田さんをキャップとする、とは、どこにも書いてないが、それはそうにきまつている数人の人たちが、その仕事を大変立派

に完成された。

たとえば *pass* と広げると、名詞の *pass* が出て来て、英語ならそれは *step* に当る、としてある。語源的に *pass* は *passer* と同根のことばで、そこでミクロ・ロベールが *passer* を使うことで *pass* を解説して見せるのと同じには行かないのは、さきにも書いたような、外国語との対訳辞書であるための限界だが、*pass* が意義の上で *step* と向い合うことを指摘する親切さは、これまでの仏和辞書の、どれにも見られるものではなかった。

多田さんの辞書は、この、名詞としての *pass* の下に、合計六つの意義をのせるが、その中には、私の手もとにあるまた一つの

仏和辞書が「上位、優位」などと訳そうとしている分が見当たらない。落ちたのではない。のせないものである。あちらの辞書がその意義の用例とするのが、多田さんの辞書にも無論のせる *avoir (prendre) le ~ sur qn.* であるのを見れば、*pass* 自体にそういう「意義」を担わせるのが正しいかどうか、すぐにわかる。多田さんの信じられる辞書である。

冗談を一つ。多田さんの辞書、もう一つの辞書、いずれも *franchir le Rubicon* をのせるが、フチ・リトレだとそれを *passer le Rubicon* という。日本側には逆にそれがない。日本人の深刻好きで、「困難」や「障害」と結びつき易いことは、*franchir* を使うことが捨てがたいのか。今でも *franchir le R.* とはいふのかな。

(尾崎雄二郎)

小野川秀美・島田虔次編『辛亥革命の研究』

(B5版、四八六頁、索引付、筑摩書房)

本書はいうまでもなく、京大人文科学研究所の辛亥革命研究班の研究報告である。

本書のもととなった研究活動の経緯や位置づけについては、多年、同研究班を主宰さ

れてこられた、小野川秀美氏が「まえがき」で述べておられる。日本の中国史研究の歴史の一頁ともなり得る文章といえよう。小野川氏が開拓された清末思想史研究をはじめ、各種の分野にわたって重厚緻密な論考を多く集めた本書の刊行は、中国近代史研究の今後の発展のための礎石として大きな意味をもっている。以下、私の拙ない理解と感想を披露して、「書評」に代えさせていいただきたい。

まず島田虔次「辛亥革命期の孔子問題」は従来「単に変法・革命のイデオロギーの問題に関してのみ論ぜられるかたむきがあった」孔子問題などを「中国伝統學術史それ自体に内在する論理の展開」として把握されたもの。読者はこの島田論文によって、清朝考証学の発達が諸子学の復興をもたらした、それが思想界における孔子の地位の相対的低下という趨勢をもたらしたこと、この趨勢の中から、改革派康有為の「教主」としての孔子像、革命派章炳麟の民族主義的孔子像や「孔教」反対論、社会主義・無政府主義者の否定的孔子像が形成されたことを理解させられる。こうして、河田悌一、森時彦両氏の研究の理解のための大きな基

礎が与えられる。本稿は本書の他の多くの論稿と同じく、中国の「四人組」の「批林批孔」期に執筆されたものであるが、「四人組」の機械的・教条的解釈に対する有力な反論となるものである。

河田悌一「否定の思想家・章炳麟」はいう。中国の「伝統學術を固執しつづけた」章炳麟は「旧来の中国の社会体制」を否定しきれぬというように反封建の思想を欠いていたがゆえに、辛亥以後において保守化・反動化していった。しかし、章の場合、反封建でのマイナスが反帝国主義ではプラスとなる。「中国の伝統に依拠し、執着したればこそ西欧に、圧迫者としての帝国主義を発見することが可能であったといえよう。」かくて、「マクロにみたばあい」章の主張の中のあるものは未来を先取りしたものであった。

森時彦「民族主義と無政府主義」は、儒教、「三綱」の相対化をめざした「揚州学派の殿軍」としての「国学の徒・劉師培」が、いかにして民族主義・民権主義を受容し、無政府主義を受容し、革命をうらぎっていたかを明らかにした。「農民と労働者を主体とする革命、さらに被抑圧民族

と被抑圧階級の連帯というような時代を先どりした観点も獲得した」劉師培の思想発展を、島田氏のいわれる「中国伝統學術史それ自体に内在する論理の展開」の中でとらえる手法はまことに鮮やかで説得的である。森氏は続ける。「だが思想の急進性は行動の急進性をかならずしも保証するものではなく、劉の無政府主義は地主制・専制君主制の廢存する中国社会を無政府状態に近いものとして是認するにいたる。かくて劉は革命をうらぎるのであると。劉の伝統思想の位置づけについては、章炳麟のそれに対する河田氏と対照的にもみえる。

以上の三論文が、伝統と思想と革新思想を機械的に分断するのではなく、また伝統思想の急進的革新思想への発展として単純に美化する一種の傾向（日本の中国近代思想史研究に根強い）と異なって、伝統と革新との内在的連関を追求し、その急進性や限界を総合的に分析する姿勢に、大きな示唆を受けた。これは私がこうした思想史研究をする気風や学力に乏しいからでもある。難解な思想史関係史籍の読解に小野川氏の「清末政治思想の研究」を頼りにした自分のかつての姿を想い出しながら、小野

川氏・島田氏の學風に親炙し得る諸氏に羨望の念を覚えた次第である。

統一思想とは一応離れた革命思想史の研究としては、寺広映雄「革命瓜分論の形成をめぐって」が「帝國主義に對する樂觀主義の誤まり」をもった孫文ら革命派は、義和團のような「民族の抵抗力を評價する点で」「その後の中國革命の志向する方向と軌跡を一にする」とする。同感する点が多い。(私見は『史料』19号、『講座中國近現代史』第三卷參照) 小野信爾「辛亥革命と革命宣傳」は丹念な史料の蒐集・分析を通じて革命宣傳の実態を解明されたもので、革命運動の組織や革命派の中下層の成員や大衆の思想動向を理解するためにも有益である。松本英紀「中部同盟会と辛亥革命」は孫文のいわば根拠地革命論と對照的な「中央革命」を模索した「宋教仁の革命方策」を丹念に跡づけた力作である。私も私見を述べたことがあるが(『史料』14号、『歴史學研究』四〇八号)、宋教仁の軌跡に関しては松本論文はきわめて詳細である。

狭間直樹「南京臨時政府について」は「辛亥革命におけるブルジョア革命派の役割」

を、これまた詳細・丹念な史料分析のうえで、立憲派や大衆との動向との関連の中で分析した大作である。私にとつては孫文の對外論を「まず現状を凍結し、国内改革をおこなつてそれから對外關係を改善する」という機械的「二段階革命論」ととらえ、それが民生主義などにも適用されるという指摘が示唆的であり、同感できる。ただし、私は二段階論なるが故に限界をただちにみとめるのではなく、むしろ「機械的」の方により多くの限界を認めるのだが。ともあれ、ブルジョア革命派の戦略・戦術の全体像を明きらかにするための一つの大きなステップが与えられたといつて良いだろう。小野和子「辛亥革命時期の婦人運動」は「女子軍と婦人參政權」を中心に、未開拓の分野に斧鉞を入れたもので、辛亥革命の精神的解放の一端とその限界をも明きらかにした力作。近著「中國女性史」と併読し辛亥革命の意義を考えるべきであらう。

副島昭照「善後借款の成立」は重要なテーマでありながら本格的な研究のなかつたので、今後の研究の出発点とならう。欲を言えば參議院の對借款態度を分析するなら

ば、「國民捐」運動との関連も考察してもらいたかつた気がする。菅野正「中華民國成立期・華南・南洋における対日ボイコット」はいままで知られていなかった、革命派主導型のボイコットの史実を明きらかにし、孫文が運動を中止させたことをも述べる。

姜在彦「新民会の活動と百五人事件」は「日韓併合」——辛亥革命期の朝鮮の國權回復運動を分析された好論であるが、私としては辛亥革命と朝鮮民族運動にとつての位置づけをもう少し聞きたかつた。守川正道「アメリカの民國承認問題」はアメリカ外交文書を検討し、アメリカ帝國主義の中國問題へのかかわりの独自性を明きらかにされた。基本的な史実について大いに勉強になったが、他に関連文獻もあるやに思われる。(なお四三〇・四三一頁で不明とされたトン・キン・チャン、ヨン・クン・タトは唐璽昌、楊広達のことであらう。いずれも同盟會員で孫文と親しい。)

以上のように本書は新聞・雜誌・外交文書・回想録などの史料を丹念に利用した論文が多く、中國近代史研究の手法の一大進歩を示している。未開拓な分野に関する論

稿にはもちろん勉強させられたが、私にとって既知のあるいは共通のテーマのもので、詳細な論証や明快な理論、論理には大いに得るところあり、また見解の一致を確認した点も少なくなかった。こうした感想は私一人のものではあるまい。本稿はほめたり、感心したりすることが多くて、「書評」にならずじまいとなってしまうが、個々の論点に対する私なりの批判や疑問は、近稿であらためて教示を得たいと思う。本書がきり開き、到達した段階を共有のものとし、新たな課題や論争の出発点とすることが、本書執筆者や読者の責務であろう。「辛亥革命の研究」の一大里程碑となる使命を本書が担っていることを確認して筆をおきたい。ただし、経済史・農民運動史・民衆運動史などの分野については、今後の発展を期待したいところである。

(日本女子大学助教授・久保田文次)

外国人研修員

Laurence Komiz (続)

戦国時代芸能史 指導教官 林岸教授

期間 五二年一〇月～五三年三月

Joshua Fogel

内藤湖南の研究 指導教官 竹内教授

期間 五二年二月～五三年一月

Peter Konic (続) オックスフォード大学研究生

尾崎紅葉と江戸文学

指導教官 飛鳥井助教授

期間 五三年一月～同年二月

Janet Abramowicz ハーバード大学美術指導教師

日本芸術に関する研究

指導教官 吉田教授

期間 五三年三月～五四年二月

李景珉 フランス国立社会科学高等院研究生

第二次世界大戦後の朝鮮政治史

指導教官 飯沼教授

期間 五三年四月～五四年四月

Peter K. Bol プリンストン大学院生

宋代地方政治政治史の研究

指導教官 梅原助教授

期間 五三年九月～五四年八月

Robert Dugene 法宝義林研究所研究者

密教の研究 指導教官 柳田教授

期間 五三年一月～五四年一〇月

外国人研究員(客員教授)

Stuart R. Schram ロンドン大学教授

現代中国の歴史的研究

受入教官 竹内教授

期間 五三年二月～五四年三月

招へい外国人学者

Jerome Chen (陳志讓) ヨーク大学歴史学科教授

期間 五三年四月～同年八月

Donald H. Shively ハーバード大学教授

(吉田教授)

期間 五三年八月～五四年七月

Mary Elizabeth Derry ミシガン大学歴史学部助教授

(吉田教授)

期間 五三年八月～五四年七月

Wm. Theodore de Bary コロンビア大学教授

(川勝教授)

期間 五三年九月～五四年六月

テキストとしての『周礼』

——先秦時代文物の研究班——

『周礼』は問題の多い書である。第一、成立年代がはっきりしない。周公の作という説から前漢末の成立という説まである。また、いかなる地域でいかなる人の手によったかも不明である。そして、その内容についても空想上の産物だとする考えもある。

このような不確かな書を、先秦の文物を研究するテキストとして最初の天官から（考工記ではなく）読み進めていることに奇異な感じを持たれる方もあると思う。私自身、『周礼』がテキストとして選ばれた事情はよくは知らないし、現在班員の方々も『周礼』という書の研究会における意味づけについてはそれほど深刻に考えておられないと思う。ここでいって考えれば、漢代の文物に引続いて先秦の文物を研究する場合、文化、社会全般にわたって包括的な記述がなされているこの『周礼』という書が、かなり有力な手懸りを与えてくれるのではないかということである。それに、出土文物から逆に、この問

題の多い書の性格を押えることができるという副産物も期待できる。これまで読んだ限りではあるが（ほぼ地官を読み終ろうとしている）、出土文物に照らしみると、物を扱う官職に関する記述にはかなり真実性があるようである。もちろん数を合せ文章を整える必要から矛盾を露呈している所もある。『周礼』はかなり確かな材料に基づいて、ある理念によって頭の中で組み立てられたものと考えられる。一方、所期の目的である文物自体の研究に対しては、先秦文物についてあまりよくはわからなくなっている鄭玄の注によらざるを得ないこともあって、あまり役立っていない。この点に関しては、『周礼』は先秦文物を議論の場に引き出してくるためのダシにすぎない。だが、研究会のテキストというものは、こうした性格を多分に持っているものであり、それで十分であるかもしれない。

ただ、会説中に気付いたことであるが、『周礼』は、その時代性が不明確なかわりに、中国社会における不変的な要素を多く内包していることである。たとえば、小さなことではあるが、商取引の方法（地官賈師）などは、現代中国の輸入公社のやり方と共通する。『周礼』が改革のテキストとして永い生命を持ち続けてきたのは、単に周公の作とされたことによるだけでなく、こうした中国の現実に合った性格を持っていたからではなからうか。

『周礼』の内包する中国的な部分は、研究会の議論に広がりをもたらし、時としては中国以外の地域との比較に及ぶこともある。この研究会では、『周礼』は中国というものを考えるための最良のダシとなっているように思われる。

(江村治樹)

危機の中の日常性

——一九三〇年代のヨーロッパ研究班——

一九三〇年代のヨーロッパは、大恐慌以後の経済的停滞と深刻な失業、ファシズムの脅威の拡大と議会制民主主義の無効化、コミニズムと人民戦線などの政治的、経済的な重い事実で満たされた、資本主義の危機の時代であったと考えられている。これらの事実がこの時代の特質を示すものであることは間違いない。しかしこれらの重い事実にかくされて見過ごされがちではあるが、時代の様相を別の方向から照射する事実や現象がある。いくつかあげて見よう。

まず一つは、ヴァカンスと観光旅行ブームの到来である。フランスでは人民戦線政府のもとで、三六年六月の

マチニョン協定にもとづいていくつかの労働者保護立法が制定される。そのほとんどはその後、廃止されたり空洞化されたりしたが、年間二週間の有給休暇法だけは存続した。この年の夏には、膨大な労働者が四〇—六〇%割引きの割引切符(余暇担当大臣の名をとって、ラグランジュ切符とよばれる)をもって特別列車で南仏海岸やアルプスに出かけた。これと並行してユース・ホステル運動もさかんになる。

イギリスでも、三八年の有給休暇法によって、観光旅行や海水浴のブームが訪れる。またイギリスでは、フットボールの賭けが非常な流行となり、三八年五月におこなわれたある調査によれば、定期的または不定期にフットボールの賭け券を買ったものは、五二%にもぼっている。

もう一つは、見市雅俊氏の指摘によると、日常生活上の細かい事実そのものへの関心が強まった、ということである。ルポルタージュやドキュメンタリーが多く書かれ、好んで読まれた。ニュース映画が人気を集めた。有名なギャラップの世論調査機関が設立されたのは、一九三六年のことである。さらに、日常生活や社会風俗上の細かい事実の蒐集と記述をおこなうマス・オブザーベーションが、新しい手法として登場するのもこの頃である。その観察の項目をいくつかあげれば、戦勝記念日における人びとの行動といった比較的真面目なものから、

ドライバーのどなり声、風呂での振舞い、塀の落書き、ひげの有無とかたち、助産婦の私生活などの、どこまで真面目なのかわからないもので、非常に多彩な項目をふくんでいる。第一次大戦後の急激な変化で著しく見えにくくなった社会の全体像を、細かな事実の観察から出発して鮮明にしようとしたということであろうか。

これらの事実や現象は、人びとが時代の危機をいかにとらえ、それにいかに対応しようとしたかを示すものとして興味深い。

(阪上孝)

中国の都市の研究

——中国近世の都市と文化研究班——

いまでは過去のシンボルと化し、取壊しの対象となっている都市の城壁。そそり立つその壁の中で、旧中国の都市は長い歴史を歩んで来た。「都市の空気は自由を作る」この言葉に立脚して自分たちの優越する世界を考える過去のヨーロッパの学者たちの目から見れば、中国の都市はまさに「自治なきマンダリン所在地」と評価されても不思議ではない。しかし、それは中国の都市の持つあくまでも一つの顔にすぎなかった。そして過去の中国

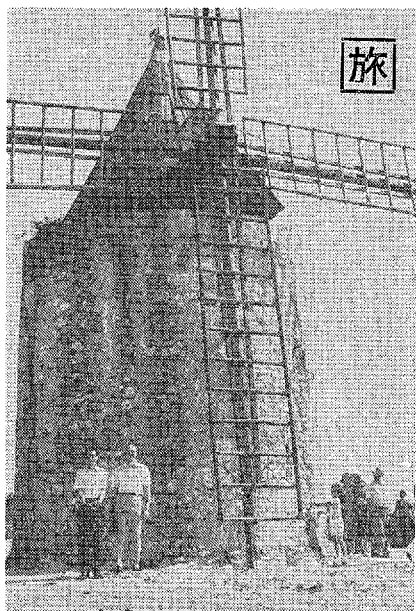
の都市は、その歴史と同じく、驚くべき多様性を備えていたのである。

東方部の歴史地理関係のフィールドでは、本年度より五年計画で、十世紀以後の中国の大都市の精密な各方面にわたる共同研究にとりかかった。三百年に及ぶ宋代の都は前半は、黄河に近い平原の真只中の開封、後半は世界で最も美しい湖と中国人が自慢する西湖の畔の杭州であった。この二つの都にはそれぞれ『東京夢華録』『夢梁録』という興味津々たる都市繁盛記が残っている。ただ癖のある文章で、よく判らぬ部分も多く、十分に利用されているとは言いかねる。『東京夢華録』の方は今を去る三十年前、入矢義高氏を中心に本所で共同研究会がもたれ、奇しくも近く、詳細な訳注が公刊される予定である。このたびの共同研究では、その驥尾に付して、まず、杭州の繁盛記『夢梁録』をとりあげた。この書物の量は『夢華録』の三倍強。内容はすこぶる豊富で多岐にわたり、百万都市杭州の生きた姿が満載されているが、なかなか一筋縄で行かぬ代物である。

幸い、杭州という町は、地形的な制約によって一千年の間、運河、橋、街路などにそれほど極端な変化はない。本所で揃えた大縮尺の地形図と各時代の地志類をフルに活用して、『夢梁録』の舞台を再現しようというのがまず第一の目標というところである。

(梅原郁)

旅



旅の思い出

河野 健 二

こんどの旅行の主な目的は、六月末に南仏ニース大学で開かれたヘルソー・ヴォルテール没後二〇〇年を記念する国際研究集会に出席して、報告をし、また討論を司会することであった。

国際集会といっても、フランスでの学会はもっぱらフランス語で行われるので、われわれにとっては苦痛と不便が大きい。まが

りなりにも使命が果せたのは、報告の文章があらかじめ研究所の松田清氏の協力でフランス文になっていたことと、ニース集会で私のあとで話された東大の小林善彦氏のフランス語が巧みであったことに由るものである。百人近くの出席者はいずれも「日本におけるルソー思想のあり方」に相当な関心を示した。

三日間の集会は、沢山の報告を消化して終った。いずれその全貌は出版されることだが、思想の影響を論ずるということは大変なことだと痛感した。国により、時代により、階層により、さまざまな受けとり方があり、反応があつて、とても一筋縄ではない。社会思想史の国際的な比較研究のプロジェクトを組んで、何年間か集中的にやってみる必要があると思つた。そのことは、思想史にとって有益であるだけでなく、各国や各地域の独自性や個性を明らかにする上で役立つだろう。

研究集会のあと、パリ大学のミッシェル・ヴィエ氏の好意で、作田啓一氏夫妻と同行してアルル、アヴィニヨン、ニームなどのプロヴァンス地域を四日間、旅行した。ゴッホの絵でおなじみの糸杉と小麦畑と太陽の農村風景のなかをクルマを走らせた。この地域はフランスというよりも、古代ローマ帝国の中心部と呼んではうが適切であつて、「地中海文明」の一環という印象がつよい。イタリアやスペインにある「闘牛場」がニームやアルルには現存しており、野外劇場やローマ時代の水道橋、ローマ風の墓地など、見るべきものは極めて多い。アルル近郊の山の中にはレ・ボーと呼ばれるルネッサンス期の都市がそのまま残つていて、「芸術村」の観を呈し、見物人がつめかけていた。プロヴァンスの言語や風俗を発掘してノーベル賞をえた詩人ミストラルの業績や遺品も大

事にされていた。地域主義はフランスでも生きていると思った。

(写真はドオデの『風車小屋だより』の風車、プロヴァンス。作田啓一氏、ミッシェル・ヴィエ氏)

ロバの井戸、或は

スペイン農業の変貌

飯沼二郎

八月三十日(水)晴。午後一時二十分、マドリッドから三時間四十分でサラマンカに着く。サラマンカは黄褐色で統一された落ちついた上品な古い都市である。駅前からタクシイで小一時間、ラ・ボベダ・デ・トロ村に着く。マドリッドの大学でスペイン経済史を教えておられる近藤仁之教授と一緒である。

ラ・ボベダ・デ・トロ村は、スペイン戦争の渦中、近藤さんの奥さんが二歳から十歳まで、両親から離れて育てられた村である。育ての親のフィロメナさんをまず訪ねる。村の真中の教会のわきに、五、六軒ならんだ内の一軒である。フィロメナさんは、近藤さんの来訪を、とても喜んで迎えてくれた。今年八十四歳だが、まだ日も齒もたっしやで、すこぶる元気な、とてもかわいなおばあさんである。夫に先立たれ、子供もなく、独り暮らし。玄關兼客間と広い台所、居間二部屋。その一室に、村にいるあいだ、泊めていただき、かつ、三度の食事、おばあさんにしてい

ただくことになった。

夕方、近藤さんと村の散歩(兼、予備調査)に行く。村の人口一〇〇〇人、すべて農民。近藤さんによれば、村はとても変わった由。五、六年前に来たときには、コムギとブドウとオリーブの畑がほとんどだったが、コムギ畑は大きくヒマワリ、ルーサン、砂糖大根の畑に変わり、ブドウ畑とオリーブ畑は全く放置されたまま草ぼうぼうで、中耕もほとんどされていない。ブドウは枯れたままで補植もされず、オリーブの枝には貝殻虫のようなものが一杯ついて立ち枯れている。しかし、夕方でも、畑で働いている人は多く、活気があり、施肥や灌漑やヤサイの収穫の真最中である。川から水を揚げている石油発動機の音が盛ん。いたるところの畑で、スプリングクラが水をふりまいている。

夕食後、村のバーで、近藤さんの知り合いのトレネロ・ガルシア老人に会う。村は二十年前から機械化が急速に進んで、今では、ロバをもつものは村でも五人ぐらいだという(ガルシア老人は、その一人である)。この村の農民はほとんど程度の自作農で、地主はほとんどいない。昔は、コムギやブドウやオリーブを沢山つくっていたが、トラクターが入ってから、機械化できないブドウやオリーブは次第に減少し、代りに機械化の容易なヒマワリ、ルーサン、砂糖大根がふえた由。

翌朝、ガルシア老人を訪ねる。荷車にロバをつけて畑に行く。ガルシア老人のお友達老人と私達一人の同勢四人。荷車に乗る。ロバは、いそがず、せかず、コトコトと歩いていく。すこぶるのどかで気持がよい。空は今日も快晴。私がロバをほめると、ガルシア老人は、それではマドリッドまでロバで連れていってや

ろうかと冗談をいう。畑に着いて、ロバを荷車から解き、井戸の揚水器の棒につなぎ、目かくしをすると、ロバはこころえたもので、自然に歩きだす。それにつれて、井戸から水が上ってきて、ヤサイ畑に流れていく。インゲン、ピーマン、トマトなど。すぐぶるよくてきている。ロバの揚水井戸は、今では村にもうほとんど残っていないという。

西ドイツの青年研究者

中 村 賢二 郎

今回の短期在外研究(三月一日―四月三〇日)の目的は、ドイツの都市における宗教改革運動と、もう一つ中近世の放浪音楽師関係の史料・文献の蒐集であった。南ドイツのシュトゥットガルト近郊にあるホーエンハイム農業大学のギュンター・フラントツ教授を頼ることにし、そこに四二日間滞在、あとはドイツ、スイス、オーストリア、イタリアの各地を旅行して回ったが、ホーエンハイム滞在中幾人かの青年研究者と交わることができた。以下はその折の印象。

ヘルマン氏は経済・社会・農業史講座の助手。いわば私の世話係としてさまざまな面倒を見て下さったが、到着後間もなくのこと、話の喰い違いからドイツ人の意識の一端を垣間見る思いをし

たことがあった。私がルターゆかりの地ウィッテンベルクへ行くつもりなのだが、東ドイツへ入るにはどのように手続きすればよいのかと尋ねたところ、東ドイツへは行けない、ウィッテンベルクなら中部ドイツへ行くべきだ、という。怪訝な顔をした私に対して、彼はたしなめるかのように、次のように説明したものである。「東ドイツとは第二次大戦後ポーランド領に編入された地域のことである。ドイツ人民共和国の地域をわれわれは中部ドイツと呼んでいる。これは最高裁判所が決めたことだ」。後日彼は私に次のようにも語った。「ソ連は没義道である。だがわれわれはアメリカも好きになれない。アメリカはドイツの統一に関心をもっていないからだ」。

ホーファー氏はウルムの宗教改革についての論文で博士号を取得した後、シュトゥットガルトから列車で半時間ばかりの町の高等学校の教師をしている。次は、彼の論文を読んで会いに行った折に彼が語った言葉。「あそこにアメリカ軍のキャンプがある。アメリカ人はどうしても好きになれない。ドイツはいろんな問題を抱えている。実にたくさんの」。宗教改革が結局のところドイツに何を残したんだって。そう、アウトリテートだけだ。現在のシュミットを含めて、ドイツの為政者が笠にきる権威、それは宗教改革の時代に作り出された観念だ。だからこそ宗教改革を知らねばドイツ史はわからないんだ」。

ヘルマン氏とホーファー氏とは異った思想の持主のようである。だが両者とも第二次大戦後ドイツが置かれている情況への反応を鋭く示しているように受け取れた。現在の西ドイツはレジャーと旅行ブームに沸きかえっているように見えるが、若い人々は

それぞれに政治的に深刻な思いを懐いているようである。
(写真はアウグスブルク、フッガーライ)

若い日本学者たち

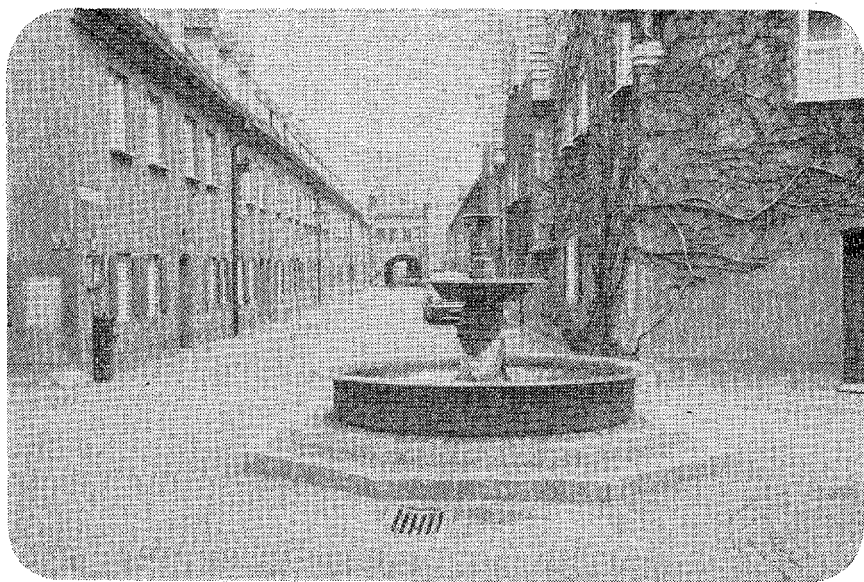
多 田 道太郎

戦前「舞踏会の手帖」という映画があった。今は中年になった女性が、はじめて舞踏会にでたときの相手を歴訪するという映画である。むかし彼女が淡い恋心を抱いた若い男たちも、今はすっかり世俗の垢にまみれている。幻滅と悔いと……

今度の私のヨーロッパ訪問には、いくぶんそういう気配があった。ヨーロッパに失望するためではない。むかし、教えたことのあるヨーロッパ人がどうしているか、その人たちを歴訪してみたい——というのが、旅行の目的の一つだった。

あらかじめ電報をうっておいいたので、パリのドゴール空港では、三組の夫婦が鉢合せした。六人の男女に迎えてもらうというのは、できすぎのようでもある。しかし、彼、彼女らはおたがいに知らない。名前だけ、私を通じて知っている。A夫人というのはどういう人——などと噂していると、A夫人というのは私です——と突然、となりの女性にしゃべりかけられてびっくりした——これはB嬢のはなし。

Aさんは源氏物語に魅せられて三月ほど私の家に滞在したこと



がある。今は四児の母。日本語もだいぶ忘れたという。B嬢とC氏とは、ともに今は日本で仕事をしている。ヴァカンスでパリに帰り、私をむかえてくれた。この人たちの日本学が、今のところは一ばんめらかに動いているようである。それからD夫人。この人は一年ほど研究所にいたことがある。日本人とフランス人の比較心理をやりたいという。目下、第三課程の勉強中だが、フランスで職があるかどうか、前途はかなり不安なようである。

パリから南へ、長い旅をしたあと、こんどはロンドンへ向った。ここにはE氏とF氏と、ふたりのイギリス人の友人がいる。むかし彼らが京都にいたころ、家が近かったこともあって、家ぐるみよく行き来した。E氏は、ほとんど独学で、たとえば九鬼周造の『いきの構造』を反訳していた。しかしこれが日本とイギリスの学界で迎えられるかどうか。失職同然でひとり日本学にとりくんでいる。その意気に打たれる。もう一人のF氏はもつと悲惨だった。これほどすばらしいアイデアをもった建築家は日本にもいないと、つねづね敬服していた若い学者であるが、彼はロンドンで夜警で食いつないでいた。

「日本学」の将来はどうなるのか。どういう激励の手段が、私たちにのこされているのか。

この国の業の深さ

大前 真

昨年末に帰国された横山氏を訪ねて（というより「頼って」と

すべきかもしれないが）オックスフォードに滞留して、イギリス中、いたるところにあるベッド・アンド・ブレックファーストと呼ばれる民宿の客用居間で就寝前に一服しながらテレビを見ていたときのことである。

たまたま同席した若い白人の男と話を始めて、出身地を問うと南アフリカだという。シヴィル・エンジニアだのことで、おそらくは安定しない国情に見切りをつけてか、妻子を残し、イギリスに職を求めて来たのだが、何しろ百万近い失業者をかかえる現状では職さがしもままならず、すでに二週間は、あちこちの町を渡って来たという。

たとえ本国であるとはいえ、生まれた国を離れて新しく出直そうというヴァイタリティに感心しながら、翌日、市の職業紹介所へ行くという彼に「グッド・ラック」などと受け答えした矢先、つけっぱなしであったテレビが、ロンドンの裏町でインド人の三人連れが車から散弾銃で狙撃され、一人が死亡したことが、また、犯人がイギリス人右翼テロリストらしいことを報じた。

とたんにかれは、苦渋に満ちた表情と声で「なんで、人は仲良く暮せんのか」と私の顔を見やった。

一瞬、頭をよぎったのは、当然のことながら、なんと身勝手な言い分であろうかという感覚であった。元はといえば、大英帝国の罪ではないか、インドを植民地にしたことの結果ではないかと言ってやりたくなった。しかし、彼とて好んで南アフリカに生まれたわけでもなく、今や、民族主義の高揚に追われて失業の身であることを思うと、何とも返事のしようもなく、その当惑を説きつつたのか、かれは目をテレビの方に移し、黙りこんだ。

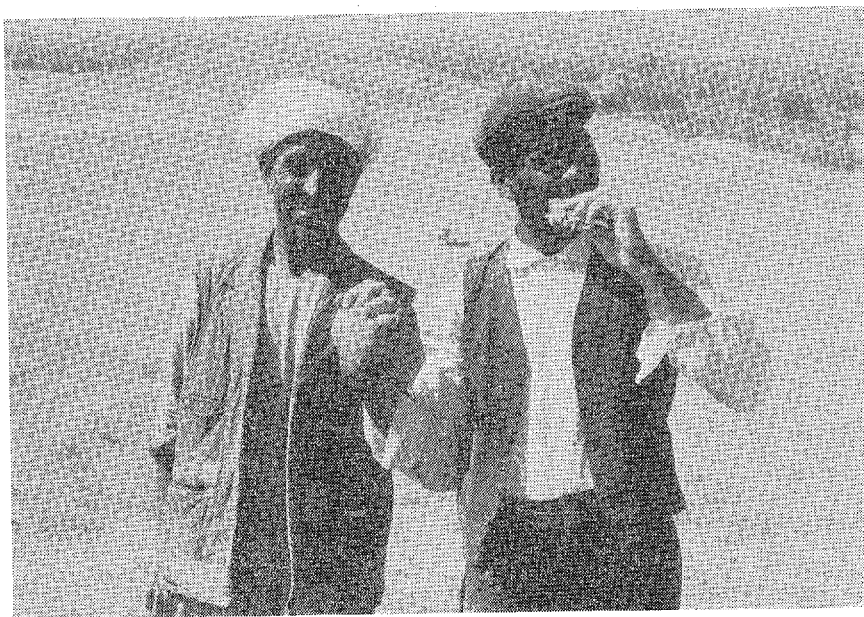
イギリスへ入国するとき、「大英共栄圏（ブリティッシュ・コモンウェルス）発行の旅券」と表示されたゲートに列を作っていた多勢のアラブ人たちを不思議そうに見ていた僕は、この国の業の深さを思い知った。

土埃の日日

田 中 淡

昨年の七月末に大阪を発って、十日間イランの遺跡などをめぐったあと、アフガニスタンで三か月滞在すると、いくらでも記事が書けるようになり、一年たつとゆきづまり、三年たつとまったく書けなくなる、といわれるそうだ。この伝でいけば、わたしたちにも一端の経験が積まれたはずである、もつとも「盲、蛇……」の類であらうが。

わたしが三か月滞在したこの国では、雨の降ることがまずなく、ときおり土埃を含んだ突風が吹くほかは、とくに刺激もないまま、毎日がただりかえし暮れていった。人びとは、その生活にすこしの疑問を抱くわけでもなく、ただひたすら葡萄を収穫して出荷し、毎日の祈りをあげ、 Noon（ Noon ）を食べ、夜が来て、朝が来て、また夜が来て、朝が来る。太陽は東から例外なく鮮明



にその姿を現わす。夕食後に見上げるパーミヤンの星座はつねに澄み渡って、東京で育ったわたしなど経験したこともない贅沢な奥行を感じさせてくれる。片言の実用語を覚え、調査の成果がだいたい明らかにされだしたころ、気がついてみると、チームルの細身の幹に、葉が色づきはじめていた。知らぬ間に、季節が移っていた。——こう書いてしまうと、あるいは、原稿催促の電話やつまらない会議（失礼）に圧迫されている向きには、別天地のように思われるかも知れないが、いいことばかりはない。

いったい、なにかを改良したり、向上したり、という意志にまったく無縁な——すくなくともわたしにはそう思えた——この国の人びとにとって、ソ連直系の人民党が政権を奪取しようと、ヨーロッパやインドから観光客が訪れようと、まして京大の調査隊が来ようと、大したことではないのだろうか。——わずかの「バクシン・シー」（心付け）が落ちるのは魅力だけれど、どうせ「バルワ・ニース」（構わない）のことばかりなのだ。いずれタラキ党が別の政権に打倒されようと、ふたたび「バルワ・ニース」なのだ。

乾燥しきった世界では、人の死も乾燥しきった様式で扱われる。死ねば、メッカを向いて土の中に埋められる。それだけだ。わたしたちは、数十年から数百年前にそうして埋められた墓を、いくつもあばいた。わたしの担当した発掘現場も、おびただしい近代の墓に満ちていた。けれども、わたしの精神状態もすでに乾燥していたらしい。骨を集め、捨てるという作業の監督。それが、当り前、「バルワ・ニース」になるのに、それほどの日数は必要でなかった。

（写真はアフガニスタン、スカンダル・チペ発掘現場、ノーンを

かじる頭梁と作業員）

インドのチベット人

御 牧 克 己

75年夏、フランスからの帰りに二週間程立寄ったものに次いで二度目の今回のインド行きも一ヶ月余り（13/12/77～18/1/78）の短いものであった。従って、観光要素を一切遮断し、これまでリストアップしてあった、存在の可非すら不明のチベット文獻の調査と、読解不能箇所をチベット人の、それも相当の学者に尋ねてみることに専念し、滞在地もベナレス（サルナート）・デリー・ダラムサラの三個所に限り、出来るだけ実質的成果をあげる様努めた。

インドに於てチベット人が伝統的な学問寺形態を保存している場所は数ヶ所あるが、特に大規模なものとしては、マイソールとサルナートを挙げることが出来る。前者には本格的な学問寺が集合しており、名称も、デブン、セラ、ガンデンとチベットに於けると同じものが夫々用いられている。各寺内部での伝統的学習が続けられている他、インド各地からチベット人学僧が、「ゲーシエー」という我々の博士号に当る学位試験を受けるために同地にやってくるのとであった。しかし残念ながらマイソール滞在



サルナートのチベット寺での「タクセル」の様子

は諸般の事情が許さず、今回は断念して次回を期すことにした。
一方、サルナートのチベット寺は初中等の少年僧の教育に重点が置かれている。彼らが学習課程で用いる「タクセル」という論

争方式を見学出来たのは興味深かった(写真参照)。立論者(立っている人物)がインド型三段論法(アリストテレス型のものの結論と大前提を入れ替えたものと思えばよい)を用いて命題を提示し、答論者(坐っている人物)がその推論式の正否を答える形で議論が展開するこの方式は、彼らが諸論書を学習し終えた後、記憶と論理展開を確かめるためのものである。

フランス留学時代の恩師 K. Bhattacharya 氏との偶然の再会、ダライラマ殿下との謁見、ニューデリーでのチベット文献出版事業の中心人物である旧友 G. Smith 氏との再会等により、今回のインド旅行は短期間ではあったがかなりの収穫を得ることが出来た。

最後に民族調査的なことを一つ。チベット婦人の既婚者・未婚者の見分け方である。我々の結婚指輪に当るもの、インド婦人の髪を左右に分けた分け目に付ける赤いベンガラに当るもの、それはチベット婦人の場合には「前掛け」である。チベット旅行記などの写真に載っている多くの婦人は前掛けをしているが、あれはそういう意味であったのか、と改めて思った。

故宮青銅器見学旅行

林 巳奈夫

三月二十四日に発って二〇日間ばかり、台北の故宮博物院に殷周

青銅器の見学に行ってきた。文学部の樋口隆康教授、東大東洋文化研究所の松丸道雄助教授と一緒に。ここには清朝の帝室蒐集品、中央博物院所蔵品を合せ、青銅彝器類だけで数百点が蔵される。質、量とも断然世界一のコレクションである。

博物院は台北市の北郊、町を出外れてから車で数分の外雙溪という山あいにある。大文字山程度の山に挟まれ、浄土寺のあたり位の平地の開けた所で、青々とした山麓の高みに黄色い瓦、中国風の建物がそびえている。

一九六六年に完工したものである。入って右手が事務室のある区劃で、青銅器銘文の研究をしている張光遠氏、青銅器など古代文様の専門の袁德星氏ら、かねてからの知り合いの方々に迎えられた。一緒に蔣復璁院長にお目にかかる。規則で写真撮影は困るが拓本なら若干はよい、というお話。故宮には春秋、戦国の珍しい青銅器が多いのだが、おかげでその紋様拓本採取の念願を果すことができた。

陳列中の青銅器も多いから、それを見て出してほしい品物のリストを作っては、ということ。先ず陳列室にゆく。銘文の重要なものの七割方は陳列されていて、撰択の標準が高級なことを感じさせる。また一般に図録の写真で見た時と比べ、遙かに質がよいという印象が強い。四九七字の最長の銘文をもつ西周時代の毛公鼎も陳列されている。その真偽についてオーストラリア国立大学のN・バーナード氏が疑議を出し、学界で論議を呼んでおり、今回の我々の旅行も、自らの目でそれを確かめたいというのが大きな目的の一つであったのだが、ガラスケース越しに一見しただけでも結果が出た。模造品説のある散氏盤についても同様であ

る。勿論真物である。

土、日以外にも祭日の多い時分で、青銅器見学に使ったのは十日ばかりであったが、重点的に選んだ百余点——銘文の重要なものは殆んど含まれている——を調査することができた。午前は九時から一時半まで、午後は二時から四時まで、予め提出してあるリストによつて守衛さんが三四人で車を押して銅器を調査室に運んで来てくれる。我々の他にも張さん、袁さん、それに若い館員の人もその機会を利用し、手にとつて熱心に研究し、時に質疑、討論も始まる。館員にも夫々自分の専門分野をもった有能な研究者がそろっている。陳列中の品は勿論だが、館の裏手の山をくり抜いた倉庫に蔵してある品物も迅速に運ばれて来るし、研究者の便宜という点においても頗る行きとどいており、私の経験でいうと米国のフリー美術館級と言うことができよう。

中国・一九七八年春・管見

樋口 謹一

中国のこのところの変わりようの加速度ぶりは、アレヨアレヨと言うばかりだ。京劇「孫悟空三打白骨精」を手がかりに、変化のさざしをかいま見たつもり（『世界』九月号）だったが、その後の動きを考えると、何を今さらという気がせぬでもない。

半年も後になって「旅」の筆をとらせるのは酷だ。いきおい、最も変わりにくい自然についての感懐に逃げこむばかりはない。

一九七八年春の中国管見と題したのは、あくまでわが日本の季節に合わせたまでのことである。この国でもサクラ前線の、モミジ前線のと南北の長大さをウンヌンするのだが、お隣りにくらべるとたわいもない。

小雨が、見る見る氷雨になり、次いで粉雪に、ついには牡丹雪に変わってゆく。気温が急速に下がっていつに違いない。

四月三十日、朝の七時すぎ。わたしはヘルピンの飯店の玄関のき下に立っていた。ゴールデン・ウィークの最中の祖国・日本をふと想うと、信じられない風景だ。

日中両国の違いも、観念の上だけに偏りがち、生はなかなか自分のウカツさ加減をあらためて思い知らされた。

雪で迎えたその日の午後一時五分、ヘルピン発の暖房のはいってない特急の寝台車で、長春、瀋陽、錦州、山海関、天津を経て、北京に着いたのは翌日の朝、六時四十分。

この間、十七時間半、長途の旅だったとはいえ、北京では柳絮——日本で研究所の諸先生がたから、柳絮のころこそ中国を訪れる最高の季節、と聞かされていたその柳絮が舞っていた。

ちようど「国際労働節」。「人民日報」は「五月の北京、万紫千紅、処々春光」と書いていたが、わたしの感覚では春はもう盛りを過ぎ、陽光はかなり強かった。

翌三日、空から上海に近づくと眼下は緑一色。その日の午後、直行した蘇州の拙政園では、うす化粧、上衣をぬいで軽装の蘇州美人に、まさに初夏の中国を感じた。

上海で二泊のあと広州着は五月五日夜。「こどもの日」の広州で目にしたのは夏服ばかり。夏はもう盛りに近かった。

黒竜江省から広東省まで、緯度で約二十度、樺太から台湾までに匹敵するが、一週間足らずで冬から春、春から夏へ。

まさに「地大物博」——素朴唯物観や自然唯物観ではないが、この中国は一筋縄ではゆかぬ、それがあらためての感懐である。

広東の街角で

梅原 郁

広東の夜は暗い。梅雨模様の生暖い四月の夜、暗い大通りを、車道にまであふれるように人が歩いている。わたしの乗ったトロバスは時折パッとライトをつけすぐまた消しながら、その人ごみの中をかき回すスピードで走る。宿舎の東方賓館から、昼間見つけておいた書物を求めるべく、北京路の新華書店まで十五分、値段にして邦貨七円の距離である。

中国関係の研究者の団に入って向うに旅行された方なら御経験であろうと思うが、限られた時間の中で本屋になだれこみ、それこそ目の色をかえて書物を買いたがるのが悲しいかなわが日本人の通例であろう。一步退ってそれを眺めていると、それは免税ウイスキーにとびつく観光客と似たような光景である。北京や上海

はいざ知らず、広東ではそうした有様はまだ珍しいらしく、手の切れるような十円札を何枚もふりかざして、一人で抱えきれぬほどの書籍を買い求める日本人を、ボカンと口をあけて見ている人もいます。

わざわざ夜、閉店間際の書店へ二、三人で出掛けたのはそうした修羅場を敬遠したためだが、話しはその帰り途のことである。

閉店のあとともいわず丁寧に包装してくれた服務員さんにお礼を言つて雑踏にもまれ、交叉点をわたつて帰りのバス停に近づいた時、一人の男がわれわれを呼びとめた。

中肉中背、ややがっちりした肩巾、角張った顔に丸い大きな眼。わたしは一瞬、大阪のあるはなし家の顔を連想し、次に何か不都合がおこつて秘密警察に誰何されたのではないかと思つた。その男は真剣な顔でわれわれ三人に話しかけた。文学専攻で語学に強いI君が言つてくれた要点はこうである。

「自分の両親は、戦争中、ここで日本軍のために非道い目に遭つてちりちりになつた。その時赤ん坊だった自分は、現在に至るまで親の顔さえ知らない。」男は大粒の涙をこぼし乍ら話し続ける。われわれは言葉もなく黙つて頭を下げるだけであつた。それは僅かな時間だったが、随分長く感じられた。男は最後に、「君たちは日本人だ。自分は自分の心をどうしても日本人に話したかった」と結んだ。

フト思い返してみると、男はその日の昼、皆で車を横付けにした新華書店の人混みの中にいた。そして一時間ほど前、再び書店に行つた時にも店の中に立つていた。彼はズッと機会をうかがつていたのではないか。そしてかなり多くの中国の人たちの心の皺

にかくされ、拭いきれぬものを正直に吐露してくれたのではないか。暗闇にゆき交うどれだけの人が心の底でこうした感情を抑えているのだろうか。戦争責任などという言葉は軽々しく口にすべきものではないと思うが、戦争の傷痕の深さをまのあたりに見たいで、われわれはトロバスの木のステップを踏んだ。

中国観劇寸感

池田秀三

此度の中国旅行で四回の観劇の機会を得た。すなわち西安の歌舞、洛陽の雑技、鄭州の豫劇「花木蘭」、上海のバレエ「玉蓮灯」である。いずれも色々な意味で興味深かつたが、特に印象に残つた後二つについて感想を述べてみたい。但、私はもとより中国の演劇事情について何の知識も持たせていないし、又日教もたつてかなり印象も薄れつつあるので、とてもない見当違いもあるかもしれない。予め御了解を願つておきたい。

さて「花木蘭」であるが、この妙齡の美女が男装して外敵をやつつけるといふお話は民衆のお気に入りらしく（どこへ行つても花木蘭の人形を売っていた）、又名女優常香玉さんが十余年ぶりに舞台に復帰する（御多分に洩れず四人組に追放されていた）というので、観衆の雰囲気は非常に熱っぽかつた。上演内容もそれにこた

えた熱演で素晴しく、唯々感嘆している内に二時間半が過ぎ去った。実は私は例のあの独特の発声に生理的嫌悪を感じる方なのだが、実際の舞台を見るとやはりあの声がピッタリとはまっている。これが伝統の力なのであろう。演技は予想に反して全体的にスピーディーで、特に殺陣はアクロバットの見事さで圧倒された。本来はもっと悠長なものであったらうと思われるが、スピード化も現代的で悪くはない。但、このような現代化或いはリアリズムと演技の処々に見られた古典的所作、約束事との間に異和感が無いでもなかった。古典劇がもつ宿命であらうか。常香玉さんは長いブランクを感じさせぬ名演。要所をビタリと決め、声も実につややかで座頭の貫禄十分。歌右衛門風の芸だが、容姿と声は梅幸に似ていておかしかった。前半の主役を演じた娘の常小玉さんは舞台姿が誠にあでやかで、まさに男装の麗人そのものの。かの鳳蘭も顔負けといったところ。

欠に「宝蓮灯」であるが、これがまた何とも楽しい。三教混濁はおろか、七夕説話、絵姿女房、孫悟空にジークフリート、これらを一縮くたにしたような話なのだが、観てみると何のことはない、中国版「白鳥の湖」「眠りの森の美女」なのである。話の筋が似ているだけでなく、幕立から一一のソロ・パドゥドゥ・群舞まで全くクラシックバレエの伝統通りなのは驚いた。まさに是れ洋為中用である。音楽はシンタ風で感心しなかったが（オケはまあまあ）、踊りは卒業公演とは思えぬ見事さであった。（なお、両公演ともヒゲに関して考えさせられる所が多々あったが、それは省略）

東洋学文献センター

昭和五三年度（第七回）

漢籍担当職員講習会（中級）

第一日（六月二十六日）

中国の書物について

中国目錄法概要

第二日（六月二十七日）

経部書

史部書

第三日（六月二十八日）

子部書

集部書・双書

第四日（六月二十九日）

天理図書館における漢籍の整理及び目錄法について

実習 金子 和正

第五日（六月三十日）

四角號碼と簡化字

最近における中国の出版事情

第六日（七月一日）

討議および情報交換

清水 茂

倉田淳之助

池田 秀三

夫馬 進

秋山 元秀

茂木 信之

金子 和正

今井 清

竹部 瑩

尾崎雄二郎

書いたもの一覽

一九七七年二月
一九七八年二月
(五十音順、●印は単行本)



・会 田 雄 次

原点からの発想

サンケイ出版 五月

正論 サンケイ新聞

五二年二月〜五三年一月(毎月)

現代のことば

京都新聞 五二年二月〜

五三年一月(毎月)

・荒 井 健

李義山七絶集釈稿(一)(共筆)

東方学報 五〇冊 二月

錢鍾書『包圍された壁』第三章・下(訳) 颯風 一一号 七月

・飯 沼 二 郎

伝統に基づく近代化——中国に旅して——

畑地農業 二二九号 一二月

東・東南アジアの稲作史における十一世紀(今西錦司博士古稀

記念論文集『探検・地理・民族誌』 中央公論社 一月

農業問題座談会(梅原昭・宮本繁・芝内正治と) 一一三

解放新聞 一月三〇日、二月六日、二〇日

書評・吉留路樹『大村朝鮮人収容所』

朝日ジャーナル 二月三日号

柏木義円と朝鮮

三千里 一三三号 二月

本もののキリスト者

現代の眼 三月号

座談会・『季刊三千里』をめぐる思想と行働(李進熙らと)

朝鮮人 一五号 三月

書評・浜口晴彦『日本の知識人と社会運動』

週刊エコノミスト 四月四日号

伝統に基づく近代化

愛農 四月〜六月号

今後の農政に対する警鐘

土 五号 四月

三里塚闘争と戦後農政

乱気流 創刊号 五月

新空港をつくらせぬ運動

毎日新聞 六月一日

知は力となりうるか

思想の科学会報 九〇号 六月

書評・熊代幸雄・小島麗逸編『中国農法の展開』

農業経済研究 五〇巻一号 六月

産地直売で労働同盟を!

解放新聞 六月二六日、七月三日

中国農業に何を学ぶか

無産階級 一二号 七月

「合理的農業」の成立と限界

農業と経済 七月号

農民の人間解放と日本農業の回復

毎日新聞 七月三日

●伝統に基づく近代化(『清泉研究叢書』第一集)

清泉社 七月

「美しい魂」との出会い(一一六)

朝日新聞 七月二三日―一八日

これらの最も小さい者のひとりに

聖書と教会 八月

大阪市総合計画局 三月

The effects of industrialization of agricultural technology
in Japan since 1860, especially after the 1868 (Meiji
Restration)

Acta Museorum Agriculturae, Vol. XI, Nos,
1-2, Prague, 1976.

1-2, Prague, 1976.

解説・『大槻正男著作集』第六卷

楽書書房 九月

共同訳『新約聖書』の刊行

読売新聞 一〇月一七日

●産直——ムラとまちの連帯(保田茂と)

ダイヤモンド社 一〇月

・池田秀三

劉向の学問と思想

東方学報 五〇冊 二月

・上田 篤

日本の橋シリーズ

太陽 一二月一六月

歴史的町並みの今日的意味

自然と文化 冬季号 一二月

文化的創造としての観光地づくり・望ましい環境地づくりの方

内閣総理大臣官房審議室 一二月

向 花——空間の美学

心(平凡社) 一月

研究学園都市「うれしの」への提案

二世紀兵庫 二月 一月

縁

現代国語 三号 二月

大阪に文化を育てよう(文化シンポジウム)

おおさか 二号 二月

大阪の都市としての復権

経済人 三月

大阪都心地区の整備に関する基礎研究

座談会・日本人のすみか(下河辺淳・山崎正和と)

Voice 三月

●シンポジウム・湖と文化

白川書院 四月

南アメリカ紀行(世界体験2 アメリカⅡ)

サンケイ出版 六月

仮の住居から「終の栖」へ

阪神ハイウェイ 五五号 七月

あたらしいコミュニティーの創造——都市人類の可能性

新都市 八月

雪国での住まい方(第二回雪国問題研究会速記録)

国土庁 八月

障子(再録)

日本自身 夏季号 八月

集合住宅研究の実態と展望(アンケート)

建築計画研究の鳥瞰と評価 九月

リビングカーの提案と試設計

自動車工業 一二号 九月

文化としての街づくり

せいぶ 九号 九月

近畿ビジョンと大阪の文化開発

大阪都市経済調査会会報 二二三号 九月

定住住宅について

住宅 九月

中之島芸能センター構想の意義

経済人 一〇月

交通シンポジウム質疑

人間と交通 一〇月

●われら新世界に参加す(共著)

毎日新聞社 一〇月

ブラジルで考えたこと

生産と技術 三〇巻四号 一〇月

流行とは何か

現代風俗 二八 十一月

・上山 春平

日本の城と国家

創造の世界 二六号 一月

アブダクションの理論

人文学報 四五号 三月

山城からの再出発

展望 五月号

・内井 惣七

ボール・ロワイアルの意味論

人文学報 四五号 三月

・梅原 郁

◎統資治通鑑長編人名索引

同朋舎 五月

一九七七年の歴史学界——回顧と展望——宋元

史学雑誌 八七編五号 五月

劉子健「劉宰小論——南宋一郷紳の軌跡」(訳)

東洋史研究 三七卷一号 六月

博物館めぐり寸感(日本青壮年中国研究者訪華団の記録)

十一月

・江村 治樹

一九七七年の歴史学界——回顧と展望——殷・周・春秋

史学雑誌 八七編五号 五月

侯馬盟書考 内田吟風博士頌寿記念

東洋史論集 八月

・太田 武男

有貞配偶者の離婚請求——緩和とその限界——

民商法雑誌 七八巻 臨時増刊号(2) 五月

・小野 和子

家とは何か——五四運動時期における結婚論を中心に——

東洋史苑 一一号 一二月

中国社会科学院の昨今

燎原 三号 一月

辛亥革命時期の婦人運動——女子軍と婦人参政権——

『辛亥革命の研究』 筑摩書房 一月

三八国際婦人デーによせて

(毛沢東思想) 学院ニュース 一二八号 三月

旧中国における『女工哀史』

東方学報 五〇冊 三月

大慶女性讃歌——三大差別と女性解放

アジアレビュー 一九七八年 夏季号

◎中国女性史——太平天国から現代まで——

平凡社 一一月

・河野 健二

バルザック『農民』

月刊エコノミスト 一二月号

新しさについて

読売新聞 一月三日

現代新聞考

朝日新聞 一月一日

一八四八年と資本主義の発展

思想 三月号

日本における共和主義の原型

展望 三月号

理論家と実務家

ジュリスト 三月号

ルソー・ヴォルテール問題

思想 六月号

「人間の生活」をめぐる多様な模索(『現代社会主義論争』)

学陽書房 七月

ルソー・ヴォルテール研究集會に出席して

朝日新聞 七月二七日

経済史の対象と方法(『社会科学の方法と歴史』)

ミネルヴァ書房 一〇月

近代化と地域主義

地域と創造 七号 一一月

「内発文化の知的創造性」アジア会議から

毎日新聞 一月二五日

元号制について

VOICE 二月月号

・勝村 哲也

修文殿御覽天部の復元(『中国の科学と科学者』)

三月

◎アジアの歴史(共著)

法律文化社 一月

・阪上 孝

二月革命と「社会主義」

思想 三月月号

・佐々木 克

岩倉具視—日本のマキアヴェリスト—

別冊歴史読本 一月月号

文明開化時代の政治構造

歴史公論 二月月号

戊辰内戦の戦略と経済

歴史読本 一〇月号

・副島 國照

善後借款の成立(小野川秀美・島田虔次編『辛亥革命の研究』)

筑摩書房 一月

中国革命の展開と日本帝国主義(木坂順一郎編『日本史・近代4』)

有斐閣新書 五月

帝国主義の中国財政支配——一九一〇年代の関税問題——

東京大学出版会 七月

・園田 英弘

「選挙」と「選抜」

歴史公論 二月月号

文明開化特集関係文獻解題

同 右

幕末海防と文明(林屋辰三郎編『幕末文化の研究』)

二月

森有礼・加藤弘之・西村茂樹・松永安左エ門・益田孝

(はるぶ・マグロウヒル社版『世界伝記人名事典』)

四月

◎九州・人国記(飛鳥井雅道編『明治大正図誌』)

五月

◎能力主義の日本の展開(産業研究所『社会・意識研究報告書』)

六月

◎書評『日本人の出世観』・『現代の出世観』

(教育社会学研究・第三三集) 九月

・曾布川 寛

皇帝と画院画家(世界の博物館21 故宫博物院)

講談社 九月

・竹内 実

夢でなかった女帝の国

週刊朝日 一月二三、二〇日号

中国文芸茶話(十五、二十)

グラフィック茶道

二〇二月月号

「稚年記」とわたしの稚年

渦 二月月号

現代中国の歴史性——「儒法闘争に学べ」運動にみえる

呂后、武則天讚美の論理とその挫折

東方学報 五〇冊

一億七千万人の受験競争

中央公論 二月月号

中華人民共和国の成立

朝日ジャーナル 二月二七日号

全人代——もう一つの視点

エコノミスト 三月二二日号

新しい華鄧体制の中国

週刊読売 三月二六日号

巴金・楊林同志(訳)

エコノミスト 四月四日号

中国文学の「復活」と再出発

毎日新聞 四月四日

明るさただよう知的状況

朝日新聞 四月一日

百花齊放と反右派闘争

朝日ジャーナル 六月一六日号

日中文化のきずな郭沫若氏

読売新聞 六月一七日

現代中国の文学

中国語 七月号

詩と革命——郭沫若が生きた中国

中央公論 八月号

家族調査(訳)

文芸 八月号

〈復活の季節〉をむかえた中国文学

中国研究 九月号

沈黙の壁——共産館をおも

京都新聞(共同) 八月一五日

ますます遠ざかる中国

朝日新聞 八月一六日

日中友好——百年のまわり道

朝日ジャーナル 九月二二日号

プロレタリア文化大革命

中央公論 一〇月号

北京のひとり者(訳)

週刊朝日 一〇月二三日号

理解と友好

朝日ジャーナル 一〇月二〇日号

晶晶の誕生日(訳)

中央公論 一一月号

鄧小平の浮沈と牽引力

アジア・クォーターリー 一〇—一二月

評伝・鄧小平

田畑書店 一月

尹県長(訳)

新泉社 一〇月

陳若曦論

〃

●魯迅遠景

〃

●増補毛沢東ノート

〃

多田 道太郎

〃

The Etiquette of the Japanese Language (1)(2)

Japan Echo 1977, No. 4 1978, No. 1.

ことわざの風景(『本』)

講談社 一月(毎月)

●クラウン仏和辞典(共編)

三省堂 二月

ボードレール『悪の花』ジャンヌ・デュヴァル詩篇評訳(共著)

人文学報 四四号 二月

●物くさ太郎の空想力

冬樹社 四月

田中 淡

中国古代建築友好訪問記

建築雑誌 一二月

隋朝建築家の設計と考証(山田慶児編『中国の科学と科学者』)

人文科学研究所

三月

仏光寺大殿(口絵解説)

日中仏教 九号 三月

●故宮博物院(樋口隆康編『世界の博物館』21 共著)

講談社 九月

田中 峰雄

形成期のパリ大学と托鉢修道会(『知識人層と社会』) 一〇月

谷 泰

イタリア人の居住様式からみた環境観(石毛編『環境と文化、人類学的考察』)

日本放送出版協会 六月

●日本語の呼称選択と関係場面(共著『日本語と日本文化』)

朝日新聞社 一〇月

磯波 謹

中国研究者のみた中国(共著) 東方 四・五 一二月・六月

制詰・壁記からみた唐の三省六部(『東アジア文化圏の成立をめぐって』)

唐代史研究会 三月

則天武后ほか

世界伝記大辞典 ほるぷ出版 七月

『唐代研究のしおり』復刊に寄せて 名著通信 三一八 八月

仏教的友誼

日中仏教 一〇号 一〇月

・中村 賢二郎

◎E・W・モンター『カルヴァン時代のジュネーヴ』（共訳）

ヨルダン社 二月

・狭間 直樹

歴史学における主観と客観（『社会科学への招待・歴史学』）

日本評論社 一二月

南京臨時政府について（『辛亥革命の研究』）

筑摩書房 一月

中国人留学生在京洛

日中仏教 九月 三月

「学問的誠実」とはなにか

歴史学研究 五月号

・浜田 正美

思想 七月号

Islamic Saints and Their Mausoleums, Acta Asiatica, 34

三月

・林 巳奈夫

殷西周間の青銅容器の編年

東方学報 五〇号 二月

漢鏡の図柄二、三について

同 右

青銅人物竿頭飾（大理参考館一人一撰）

天地 一一月

・樋口 謹一

自己保存・自己優先・共同保存——『社会契約論』を読む

思想 六月

中国現代化管見

日中協ニュース 七月一日

中国とどこどころ——中央と地方

公明 八月

「孫悟空三打白骨精」随想

世界 九月

◎ルソーの政治思想

世界思想社 一〇月

・深沢 一幸

文芸—短篇（『中国総覧』一九七八年版）

霞山会 一二月

◎毛沢東選集第五卷（第一分冊）（共訳）

三一書房 一二月

◎毛沢東初期著作集—民衆の大連合（共訳）

講談社 一月

◎毛沢東選集第五卷（第二分冊）（共訳）

三一書房 二月

・古屋 哲夫

第七一・七二議會解説（『帝國議會誌』第三〇、三二卷）

一二月、一月

・松井 健

サバンナ・ウッドランドの自然と環境観（石毛編『環境と文化』）

日本放送出版協会 六月

フォーク・カテゴリーの位相問題——フィリピン・バタン島

における民俗分類の研究から——

民族学研究 四三卷一号 六月

コメント（室山敏昭「言語内的うつわと言語外的事実」）

季刊人類学 九卷三号 九月

書評・史料源蔵・光著『コタン生物記』——Ⅲ

季刊人類学 九卷三号 九月

・松田 清

一八世紀フランスにおける聾啞教育（Ⅱ）

人文学報 四四号 二月

ボードレール『悪の花』ジャンヌ・デュヴァル詩篇註釈（共著）

人文学報 四四号 二月

文字と言葉の文化価値——日仏聾啞教育の成立期にみる——

(日本人の価値意識の変化に関する歴史的・文化的調査研究)

ルソーの野生人について

思想 六月号

◎J・M・G・イタール『新訳アヴェロンの野生児』(共訳)

福村出版 一二月

・見市雅俊

ジョージ・オーウェルと30年代の神話

思想 八月号

B・L・ハチンズ・ロバート・オウエン『イギリス社会思想

家伝』(訳)

ミネルヴァ書房 一〇月

・御牧克己

仏教文庫文献解題 Bibliotheca Buddhica VII, VI, XI, XXV, XXV, XXV

名著普及会 九月

講演和訳・ジャク・メイ『法宝義林』(Hōbōgiri)——全般

的紹介と過去十年間の回顧——

鈴木学術財団『研究年報』一五号 一一月

・森時彦

中共中央のチベット工作の方針にかんする指示 他四編(訳)

(竹内実監修『毛沢東選集第五卷』I) 三一書房 一二月

林彪同志あての手紙(訳)『民衆の大連合』 講談社 一月

民族主義と無政府主義 小野川秀美・島田虔次編『辛亥革命

の研究』

筑摩書房 一月

フランス勤工儉学運動小史(上)

東方学報 五〇冊 三月

党内団結の弁証法的方法 他一編(訳) (竹内実監修『毛沢

東選集第五卷』Ⅱ)

三一書房 四月

〃五四〃研究の問題点

・柳田聖山

今月のことば

禅語コーナー

建仁寺と首楞嚴經——中世漂泊、その一

現代中国学会報 八月

花園 一二月——二月

花園 一二月——二月

禅文化 八七号 一二月

水上勉『わが六道の闇夜』解説

中公文庫 一二月

禅学叢書(唐代資料編)解説

中文出版社 一二月

勅修百丈清規左綱・庸岫余録影印序問題と研究 七の五

布袋と弥勒

白隠と般若心経

檀林寺縁起——中世漂泊、その二

禅と因果(『仏教思想』3)

中国仏教における実践道(早島鏡正編『仏教の歴史的発展に

おける実践の研究——インド哲学諸派との対比において』の

うち)

髪とフロッキー山田無文学長を送る

室町時代の禅林(別冊太陽『水墨画』)

納敗詩抄——中世漂泊、その三

雪竇頌古の世界

手づくりの学門(臨済禅叢書パンフ)

達磨(『世界伝記大事典』3)

架空対談、正法眼蔵の周辺——中世漂泊、その四

禅文化 九〇号 九月

水上勉・雁の寺 (京の文学風土記)

朝日新聞 九月

禅学大辞典、書評

週刊読書人 一二四九号 九月

●一休 (『日本の禅語録』 十二、共編)

講談社 一〇月

新統灯史の系譜、叙の一

禅学研究 五九号 十一月

正法眼蔵と公案

駒沢大学仏教学部論集 九号 十一月

山下 正男

●植物と哲学

中央公論社 一二月

集合論とアトミズム

現代数学 一二月号

西洋論理学史上における『ポール・ロワイアル論理学』の意

人文学報 四五号 三月

数学と哲学における対応の概念

Basic 数学 八月号

花についての西欧思想

Panoramic Mag. is 一〇号 九月

眼球モデルの二つの哲学

ヒュステリー 九、一〇月号

書評 H. Enders Sprachlogische Traktate des Mittelalters und der Semantikbegriff

中世思想研究 二〇号 一〇月

Basic 数学 一一月号

解析学とヘイゲル

Basic 数学 一一月号

山田 慶児

●中国の科学と科学者 (編)

人文科学研究所 三月

●朱子の自然学

岩波書店 四月

横山 俊夫

「神国」への道 (林屋編『幕末文化の研究』)

岩波書店 二月

高島秋帆 (『世界伝記人名事典』所収)

ほるぷ出版 四月

吉田 光邦

障壁面の流れ

アート・トップ

科学と呪術の併存

国文学

年中行事絵巻考 (『年中行事絵巻』所収)

一二月

人形のたどった運命 (『日本の人形』所収)

一二月

江戸明治の漆器 (『漆器』所収)

一二月

洋式砲術の謎 (『日本の歴史』14所収)

一月

幕末文化の構造試論 (『幕末文化の研究』所収)

二月

植物のデザイン (『世界の植物』所収)

三月

つむぎ「きもの装い」

三月

神仙思想 (『不死の信仰』所収)

三月

別子銅山 (『一枚の地図』所収)

三月

大江山 (『能楽百話』所収)

三月

京の人形師

京都

帯結びの変遷「美しいキモノ」

四月

家モデルの文化

日本及日本人

五月

近代技術と琵琶湖疏水 (『琵琶湖疏水図誌』所収)

五月

早春幻語

大学世界

五月

鷹峯光悦村

五月

茶の湯の工芸 (『茶』所収)

五月

京都叙景 (『版画京都百景』所収)

六月

●南洋の眼

朝日新聞社

京友禅の歴史「染織と生活」

六月

●日本のかたち (共著)

六月

カーベット

葵

六月

京のデザイン(『現代日本写真全集』4 所収)

七月

団扇の歴史(『京の団扇』所収)

七月

仙台平と博多織(『人間国宝シリーズ』18)

七月

これからの手づくり(対談)

七月

美を生む産業(『近世京都』所収)

七月

茶道具の歴史(『茶道具』所収)

七月

走獸画の源流(『日本屏風絵集成』16 所収)

七月

小紋の変遷「きものと装い」

八月

ヒューマンサイズの技術

八月

工芸雑感

八月

桃山文化の特質(『日本美術全集』17)

八月

複合機器

八月

わたしの散歩道(『京都洛東』)

九月

個性と社会の時代

九月

四天王寺舞楽装束類(『四天王寺舞楽』所収)

九月

伝統的工芸品産業の問題

九月

人間と黄金の歴史

九月

いけ花と花器(『いけばな』所収)

九月

市民生活と京都の建築

九月

染織展によせて(日本の染と織の美展目録)

九月

複製版日本科学古典全書解説1~10巻

九月

工芸史散策

九月

染織さまざま

九月

日本の工芸・織・刺繡・陶磁(てい談)

四・六・九月

吉川 忠 夫

眞人と革命

東洋学術研究 一七巻五号 九月

渡部 徹

◎日本近現代史辞典(時野谷勝・古屋哲夫らと共編)

◎部落問題・水平運動資料集成 補巻一・補巻二(秋定嘉和と共編)

大正デモクラシーと軍隊 部落解放史・ふくおか 一〇号 二月

書かれざる編集後記——『日本近現代史辞典』の編集を終えて——

福岡連隊事件の問題点 部落解放史・ふくおか 一一号 三月

松本治一郎(『世界伝記大辞典』日本・朝鮮・中国編)

書評・宮下弘『特高の回想』——戦前の共産主義の妖怪と運動の落差——

部落差別と解放運動の歩み(北九州大学「同和教育関係資料」所収)

水平社運動より見た三重県社会運動史——大山峻峰著「三重県水平社労働運動史」を読んで——解放教育一〇〇〇号一〇月

部落委員会活動

座談会「近代被差別部落と天皇制」(井上清・原田伴彦と)

モリタ労働組合史の発刊によせて

モリタ労働組合「歴史への接近・自覚」 一一月